

木更津市田向遺跡

—木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線埋蔵文化財調査報告書—

平成17年3月

千葉県 県土整備部

財団法人 千葉県文化財センター

た むかい い せき

木更津市田向遺跡

—木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線埋蔵文化財調査報告書—



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第521集として、千葉県君津地域整備センターの木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線建設事業に伴って実施した木更津市田向遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、奈良・平安時代や中・近世の掘立柱建物跡などを検出し、この地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深める資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦労をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成17年3月25日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 清水新次

凡　　例

- 1 本書は、千葉県君津地域整備センター君津整備事務所による木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県木更津市江川字鰯田709ほかに所在する田向遺跡（遺跡コード206-019(4)(5)）である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県君津地域整備センターの委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者、実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、上席研究員 地引尚幸が行った。
- 6 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。

第1図 国土地理院発行地形図「奈良輪」1/25,000（昭和37年測量・平成9年修正）

国土地理院発行地形図「木更津」1/25,000（大正10年測量・平成9年修正）

*旧河道・自然堤防・砂州・砂堆・三角州については、昭和46年国土地理院発行1/25,000
「土地条件図木更津」をもとに作成した。

第2図 木更津市発行 1/2,500地形図IX-LE11-4（昭和60年測量・平成6年修正）

1/2,500地形図IX-LE12-3（昭和60年測量・平成6年修正）

1/2,500地形図IX-LE21-2（昭和60年測量・平成6年修正）

1/2,500地形図IX-LE22-1（昭和60年測量・平成6年修正）

- 7 周辺地形航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影の1:10,000のものを使用した。
- 8 本書で使用した座標値は、すべて日本測地系に基づく平面直角座標で、図面の方位はすべて座標北である。
- 10 本書で使用した遺構の略称は以下の通りである。

S B : 挿立柱建物跡 S K : 土坑 S D : 溝 S H : 柱穴 S X : その他
- 11 本書で使用した遺構番号は、基本的に調査時の番号を踏襲した。
- 12 図面等におけるスクリーントーン及び記号等の用例はそれぞれに明示した。
- 13 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、千葉県君津都市計画事務所（現千葉県君津地域整備センター君津整備事務所）、木更津市教育委員会、財団法人君津都市文化財センター松本勝氏、木更津市水道部工務課、（株）東京ガス、（株）NTT-ME、江川区長の御指導・御協力を得た。

本文目次

序文

凡例

第1章はじめに.....	1
第1節 調査の概要.....	1
1 調査の経緯.....	1
2 調査の方法と成果の概要.....	4
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境.....	5
第3節 基本層序.....	7
第2章 検出した遺構と遺物.....	9
第1節 遺構と出土遺物.....	9
1 掘立柱建物跡.....	9
2 土坑.....	17
3 溝状遺構.....	17
4 その他の遺構.....	20
第2節 遺構外出土遺物.....	27
第3章まとめ.....	45
報告書抄録.....	巻末

挿図目次

第1図 遺跡の位置と周辺の環境.....	2	第15図 SD-220・221	25
第2図 田向遺跡(1)(2)調査範囲とグリッド設定図	3	第16図 SD-203・207・208・209	27
第3図 基本層序.....	7	第17図 SD-257・258・259	27
第4図 SB-001・002・003	10	第18図 SD-195出土遺物	28
第5図 SB-004・005・006	12	第19図 SD-198出土遺物	28
第6図 SB-002・003・006出土遺物	13	第20図 SD-247出土遺物	29
第7図 SB-005出土木製品	13	第21図 SD-218出土遺物	29
第8図 SK-170・217・251出土遺物	14	第22図 SD-219出土遺物	29
第9図 SK-164・170・217・251	15	第23図 SD-191出土遺物	30
第10図 SD-163・199	17	第24図 SD-214出土遺物	30
第11図 SD-185・195・198・249・250・254	19	第25図 SD-239出土遺物	30
第12図 SD-190・191・192・214・239・241	21	第26図 SD-190出土遺物	30
第13図 SD-218・219・242・247	23	第27図 SD-220出土遺物	30
第14図 SD-215・216	25	第28図 SD-242出土遺物	31
		第29図 SX-252	32

第30図 遺構外出土遺物	34	第32図 遺構全体図(2)	36
第31図 遺構全体図(1)	35	第33図 遺構全体図(3)	37

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	6	第4表 石器及び石製品一覧表	39
第2表 遺構一覧表	38	第5表 土器観察表	40
第3表 土製品一覧表	39	第6表 非掲載遺物重量表	43

図 版 目 次

図版1 田向遺跡周辺航空写真	SD-214断面(南西から)
図版2 A-1区より北側遠景(南から)	SD-218完掘(南から)
· A-2区より南側遠景(北から)	SD-219断面(北西から)
図版3 A-1区全景(東から)	SD-220断面(南西から)
· A-2区北側全景(東から)	SD-221断面(南西から)
B-1区全景(北から)	SD-242遺物出土状況1(南西から)
図版4 A-2区南側(南から)	SD-242遺物出土状況2(南西から)
B-2区全景(北から)	SD-247遺物出土状況(南東から)
A-3区北側(南から)	SD-249完掘(東から)
A-3区南側(南から)	図版8 SH-168<SB-001>断面(西から)
C-1区全景(東から)	SH-168<SB-001>完掘(西から)
C-2区全景(北西から)	SH-196<SB-002>(南西から)
16年度調査区北側(北から)	SH-226完掘<SB-003>(南から)
16年度調査区南側(南から)	SH-244<SB-005>柱・碎石出土状況1 (南から)
図版5 SX-252(北西から)	SH-244<SB-005>柱・碎石出土状況2 (南西から)
SK-170完掘(東から)	SH-248完掘<SB-006>(東から)
SK-217遺物出土状況(南から)	SH-260断面<SB-004>(東から)
SK-217完掘(東から)	図版9 遺構内出土遺物1
SK-251底面遺物出土状況(東から)	図版10 遺構内出土遺物2
SK-251完掘(東から)	図版11 遺構内出土遺物3
図版6 SD-163完掘(北から)	図版12 遺構内出土遺物4
SD-190断面(北から)	遺構外出土遺物1
SD-192遺物出土状況(南から)	図版13 遺構外出土遺物2
SD-195断面(東から)	遺構外出土遺物3
SD-198断面(東から)	
SD-199遺物出土状況(北東から)	
SD-207完掘(南東から)	

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1. 調査の経緯

千葉県君津都市計画事務所（現千葉県君津地域整備センター）は、木更津市江川地区における木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線建設事業を計画した。この事業に当たって千葉県君津都市計画事務所は千葉県教育委員会に、事業予定地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会を行った。これに対して、千葉県教育委員会より事業予定地内に遺跡が所在する旨の回答が出された。その後、遺跡の取扱いについて、千葉県教育委員会と千葉県君津都市計画事務所との間で協議が重ねられ、その結果発掘調査による記録保存の措置を講ずることで協議が整った。調査は財団法人千葉県文化財センターが千葉県君津都市計画事務所との委託契約を締結し、発掘調査を行うこととなった。

発掘調査は、平成14年・平成16年の2回実施した。平成14年度は、現道を除く3,771m²を調査対象とし、その10%に当たる377m²について確認調査を行い、その結果に基づいて1,505m²の範囲について本調査を実施した。平成16年度は、平成14年度の調査結果に基づいて現道570m²を調査対象とし、本調査を実施した。

なお、本遺跡名は田向遺跡としたが、これは、木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線が県道袖ヶ浦中島線に接続しており、本遺跡が、平成17年3月に刊行した「木更津市田向遺跡－県単道路改良（幹線）（埋蔵文化財調査）委託－」の調査区の南側に隣接していることから、同一遺跡と考えたことによる。各年度の担当者と作業内容は次のとおりである。

平成14年度（確認・本調査）

期 間 平成15年1月7日～平成15年3月28日

南部調査事務所長 鈴木定明

担 当 上席研究員 地引尚幸

作業内容 確認調査377m²/3,771m² 上層本調査1,505m²

平成16年度（本調査・整理・報告書刊行）

期 間 平成16年6月1日～平成16年6月25日（本調査）

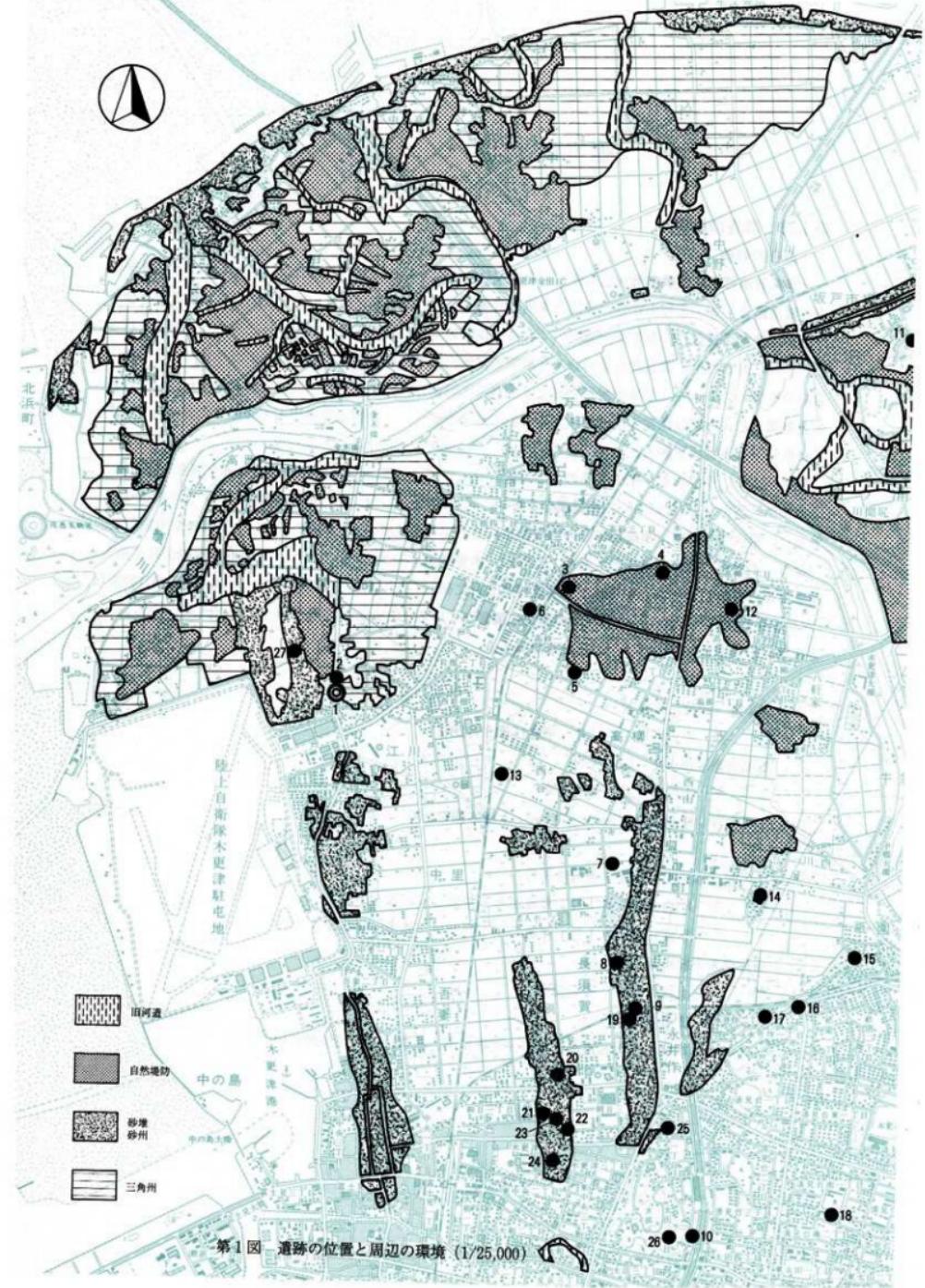
平成16年12月1日～平成17年1月31日（整理・報告書刊行）

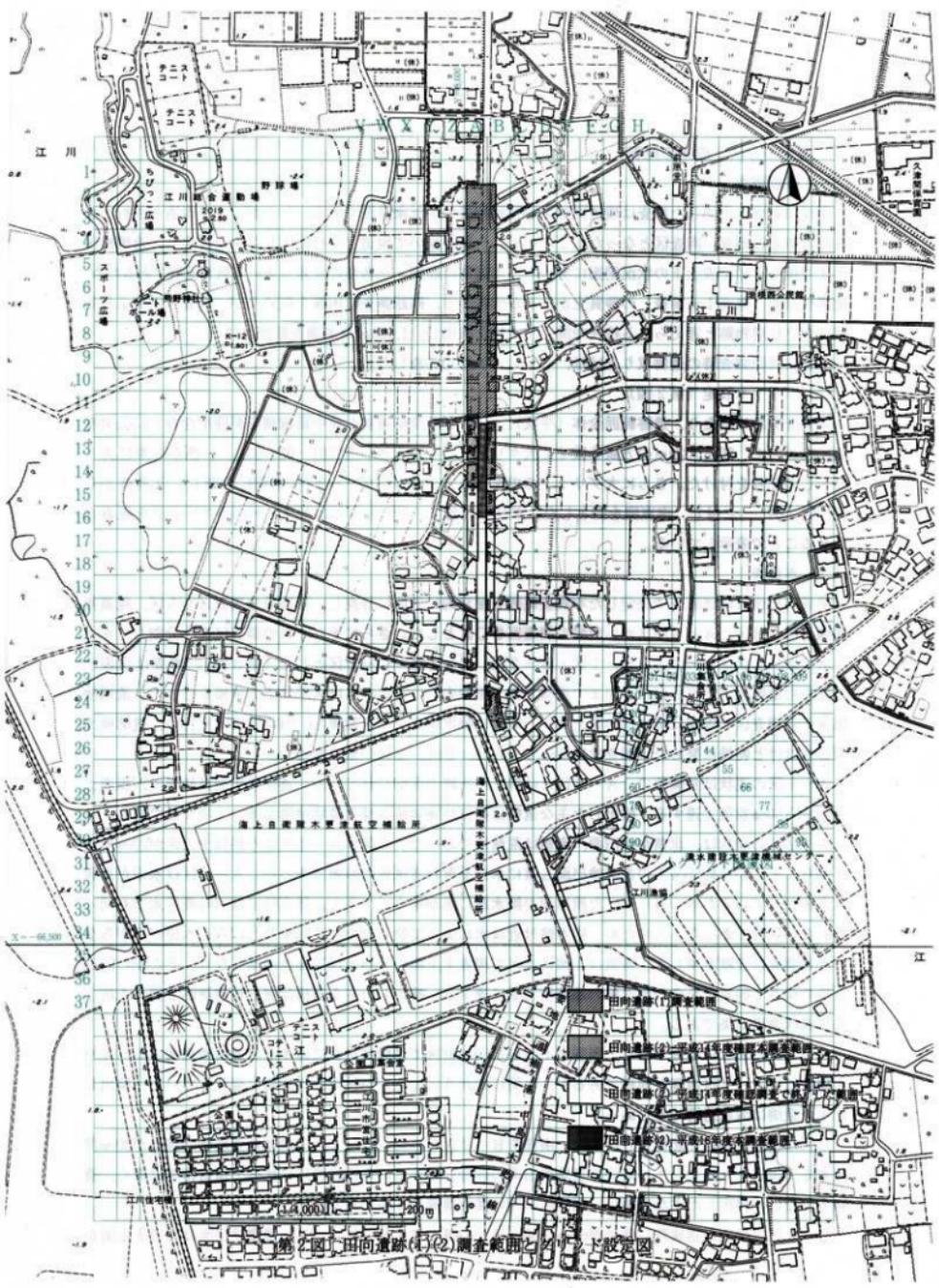
南部調査事務所長 高田博

担 当 上席研究員 地引尚幸

作業内容 上層本調査570m²

水洗・注記、実測、挿図、図版作成、原稿執筆、報告書刊行





第2回「田向遺跡(1)(2)調査範囲と(3)上設定図

2 調査の方法と成果の概要

(1) 確認調査

平成14年度に実施した調査は現道両脇の道路拡幅部分が対象範囲である。したがって、現道と平行となるほぼ南北に細長い調査区となった。このため、一部を除いて現道と平行にトレーンチを設定し、遺構検出面まで掘り下げて表土下の状況把握に努めた。本遺跡は砂州・三角州に立地している低地遺跡であるため、遺構検出面（標高1m前後）の砂質土から水が湧き出て、確認調査は困難を極めたが、調査区中央より北側で掘立柱建物跡と考えられる柱穴や溝、土坑等を検出し、1,505m²を本調査範囲とした。

なお、確認調査時の遺物取り上げは、トレーンチ単位で実施した。

(2) グリッド設定（第2図）

本調査実施に当たり、遺跡範囲全体（平成11・12・14年度県道袖ヶ浦中島線調査範囲を含む）に公共座標に基づいて、20m×20mの方眼を被せて大グリッドとし、北から南に01・02・03……、西から東にA・B・Cの記号を付けた。さらに大グリッドの中を2m×2mの小グリッド100区画に分割し、北西隅から00・01・02……と付し、南東隅を99とした。グリッド名は、原則として大グリッドと小グリッドを組み合わせることで表示している。

(3) 本調査

平成14年度は確認調査で決定した本調査範囲を便宜的に3区に分割し、現道東側調査区をA区、現道西側調査区をB区、A・B両区から南側の調査区をC区とした。さらにそれぞれの調査区を小分割してA-1区・A-2区・A-3区、B-1区・B-2区、C-1区・C-2区とした（第3図）。調査は現表土上面から遺構検出が可能になる面まで重機で表土を除去し、そこからは入手による清掃を行った。遺構検出後、各調査区の周囲に排水用の溝を掘り、隅には排水用ポンプを設置し、24時間排水を行い、遺構検出面の水はげと乾燥に努めた。調査は原則としてA区、B区、C区の順に進めた。

A-1区の現状は荒蕪地で、A-2区とは畔と用水路で区切られている。遺構検出面は砂層で、現表土上面から50cm前後で達する。検出した主な遺構は掘立柱建物跡2棟と溝状遺構2条、土坑2基である。

A-2区の現状は、北側が水田面、南側は荒蕪地であった。北側はA-1区より耕作土上面が20cm前後下がり、そこから約55cm下の遺構検出面も常に水分を含む青灰色の砂層であった。A-2区は水田が東側にも広がっているため、掘り下げた検出面や排水路に水が集まってきて、降雨時には24時間排水でも間に合わない状況であった。このため、排水路付近は水によって抉られたり、降雨後しばらく水位が下がらないなど調査に支障を來した。南側は北側に比べて現表土上面のレベルは70cm前後高くなり、そこから90cm前後の深さで砂質土を含む粘土層の遺構検出面に達する。検出した主な遺構は掘立柱建物跡2棟、土坑1基、溝状遺構6条である。

A-3区の現状は宅地であり、現表土上面から60cm前後で遺構検出面に達する。遺構検出面のレベルや土層はほぼA-2区南側と同様であるが、南側に向かうにしたがい検出面は砂層に変化していく。検出した主な遺構は溝状遺構4条である。

B区は市道を挟んで北側をB-1区、南側をB-2区とした。B-1区には宅地造成時の盛土が30cm前後ある。現表土上面から1m前後で遺構検出面の砂層に達する。本区は他区に比べて遺構密度は薄く、遺物も少ない。検出した主な遺構は、掘込みの浅い溝状遺構が4条である。

B-2区には宅地造成時に盛土が60cm～80cmほどの厚さで入れられている。遺構検出面は現表土上面か

ら1m前後下の粘土層である。本区ではA-3区方向に向かう2条の溝状遺構を検出した。

C区は南北方向の県道が南東方向に折れ曲がる地点で、北側をC-1区、南側をC-2区とした。両地点とも現状は宅地である。

C-1区は現表土は30cm前後の盛土である。現表土上面から1.1m前後の青灰色土～緑灰色土が遺構検出面であった。遺構検出レベルは全地点の中で最も低く、検出面ではかなりの水が湧き出てきて、遺構検出面の清操作業も難しい状態であった。検出した主な遺構は、溝状遺構2条である。

C-2区の現表土は70cm前後の客土である。遺構検出面は現表土上面から1m前後下の粘土層である。検出した主な遺構は、溝状遺構2条である。

平成16年度は、平成14年度の確認・本調査結果から現道部分の本調査を実施した。しかし、現道の西側にはNTTの光ファイバーが、東側には水道管とガス管の本管が埋設してあるため、調査はかなり制限を受けることとなる。そこで、調査前に事業者及び木更津市水道部・(株)NTT-ME・(株)東京ガスの担当者と現地協議を行い、埋設状況について確認をして調査方法を検討した。埋設物はそれぞれ地上より1.2m付近に埋設されており、平成14年度の調査結果から考えると、遺構検出面より下まで掘削されていることになる。また、水道管は旧管を使用しているため強度に問題があることから、実際に調査可能な幅は、道路中央付近2m前後となった。

重機を使用して表土除去を行ったが、水道管を横断する箇所には鉄板を敷き、振動や圧力の軽減に努めた。遺構検出面の清掃後、排水用の溝を両側に掘り、単管パイプと厚板を使用して溝の壁面崩落防止をした。また、水田耕作が行われている時期でもあり、排水に伴う砂の流出で用水路が塞がることも予想されたため、沈殿マスを排水口に設置した。排水用ポンプで24時間排水を行ったが、梅雨の時期で降水量が多く、たびたび調査区内はプール化し、数か所で排水溝の壁面が崩落した。

遺構は平成14年度に検出した遺構に連続するものや関連する遺物が出土した。また、新たに掘立柱建物跡2棟を検出した。しかし、調査範囲の幅が狭小なため、遺構の一部しか検出できないものが多く、遺構全体の把握が難しく課題を残した。検出した主な遺構は、掘立柱建物跡2棟、土坑1基、溝状遺構7条である。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境（第1図）

今回発掘した田向遺跡（以下「田向遺跡(2)」とする。）は木更津市の北西部、木更津市江川字鋸田709ほかに所在し、当センターが発掘調査を実施した平成11年度・12年度・14年度の田向遺跡（以下「田向遺跡(1)」とする。）の南側隣接地にある。本遺跡は、小櫃川最下流左岸の標高は1m～2m前後の低地に立地し、東京湾へは約1.5km、小櫃川へは約1.2kmほどの位置にある。

小櫃川は、房総丘陵の清澄山系に源を発し、木更津市金田で東京湾に注ぐ河川であり、下流部に広大な沖積平野を形成している。本遺跡は、この沖積平野の一画にあり、周辺には自然堤防・旧流路・浜堤などの微地形が散在する砂州・三角洲地域である。周辺では、現在もこの低地を利用して水田耕作や畑作が行われたり、自然堤防上や砂丘列上に多くの住宅が建設されている。

小櫃川下流域での低地遺跡の存在は、県道の改修改良工事・アクアライン・館山自動車道の建設に伴う埋蔵文化財調査によってようやく明らかになり始めてきている。

平成11年度・12年度、14年度に行われた田向遺跡(1)¹¹の調査は、県道中野畠沢線に接続する県道袖ヶ

浦中島線の県単道路改良事業による全長約200m、幅約27mの範囲内で行われた。検出された遺構は、古墳時代の竪穴住居跡3軒・土坑11基・溝状遺構14条・水田跡2面・烟跡1面、奈良・平安時代の掘立柱建物跡1棟・井戸状遺構3基・土坑29基・溝状遺構38条・柱穴52基である。このことから、本遺跡についても古墳時代から奈良・平安時代の遺構が検出されることが想定された。

ほかの周辺遺跡としては、下流域では田向遺跡(2)の東1.4kmに自然堤防上に展開する高砂遺跡²⁾がある。発掘調査によって弥生時代中・後期の竪穴住居跡や同時後期の方形周溝墓・土坑・溝、古墳時代中期の円墳の周溝が検出されている。東1.2kmにある水深遺跡³⁾も自然堤防縁辺に形成された遺跡である。弥生時代後期の集落遺跡である。東2kmにある本郷3丁目遺跡⁴⁾は、弥生時代中期から古墳時代前期にかけての集落が検出されている。これら3遺跡からは遺構の年代よりも古い縄文時代晩期の土器が出土している。東1.4kmにある松山遺跡⁵⁾では弥生時代後期から平安時代にかけての集落が存在していたことが確認され、自然堤防の広範囲に集落が展開していることが予想される。また、南東2kmには四宝塚遺跡⁶⁾があり、砂丘列上に弥生時代後期の住居跡と後期の古墳が検出された。また、縄文時代後期の土器がまとまって出土している。現在の海岸から3kmほど離れたこれらの自然堤防及び砂丘列上に立地する遺跡の形成時期は、土器の出土状況から考えると、遺構の時期より古い縄文時代後期あるいは晩期の段階まで遡る可能性がある。

小笠川下流域の低地や台地上には数多くの古墳が確認されている。田向遺跡(2)の東2.3kmには前方後円墳である高柳古墳、南東1.1kmには全長132mの前方後円墳である銚子塚古墳、南東2.7kmには全長80mの前方後円墳の浅間古墳のほか、丸山古墳(前方後円墳)、県指定史跡である前方後円墳の金鈴塚古墳があり、出土した金鈴は国の重要文化財に指定されている。ほかにも、さかもり塚古墳(前方後円墳)、塚の越古墳(円墳)、松面古墳(円墳)、鳥越古墳(前方後方墳)、稻荷森古墳(前方後円墳)、大塚山古墳(前方後円墳)、小の塚古墳(円墳)、鶴巻塚古墳(大型円墳)などが知られている。

第1表 周辺遺跡一覧表

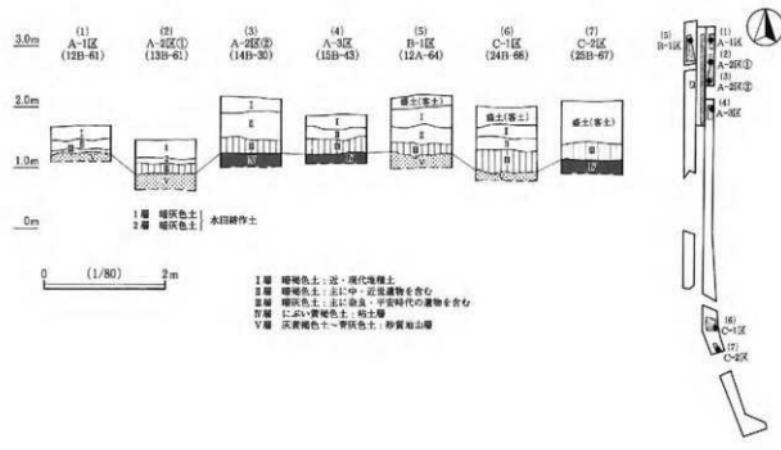
1 田向遺跡 (2)	8 北遺跡	15 大塚山遺跡	22 松面古墳
2 田向遺跡 (1)	9 長須賀東谷遺跡	16 鶴巻塚古墳	23 塚の越古墳
3 高砂遺跡	10 宮ノ下遺跡	17 小の塚古墳	24 稲荷森古墳
4 本郷三丁目遺跡	11 坂戸神社古墳	18 浅見台古墳群	25 鳥越古墳
5 松山遺跡	12 高柳遺跡	19 丸山古墳	26 太田山古墳
6 水深遺跡	13 銚子塚古墳	20 金鈴塚古墳	27 熊野神社塚群
7 四宝塚遺跡	14 浅間古墳	21 さかもり塚古墳	

第3節 基本層序（第3図）

田向遺跡(2)は砂州・三角州地域に構築された遺跡である。小櫃川下流域の沖積層は、基底砂礫層・下部砂泥層・中部砂層・上部粘土層・上部砂層・上部陸成層の6層に区分される。東京湾の海面が大きく下降、上昇を繰り返す中で、上流から運ばれてきた砾や砂泥が順次堆積し、基底砂礫層・下部砂泥層・中部砂層・上部粘土層が形成された。今回の発掘調査で地山ととらえた砂層はこの上部砂層と考えられ、古墳時代までには相対的海退により湾口が閉塞してこの砂層を堆積する砂州・三角州地域が形成されたものと考えられている。⁷⁾

本遺跡の基本層序を考える上で、平成14年度に本調査範囲となった4区7地点から基本となる土層断面を抽出して考えることにした。これは、微地形や土地の変化のため調査地点により土層の堆積状況や土色も多少異なるためである。

7地点の土層を遺物検出面、遺物の包含状況、それぞれの土層の堆積状況等よりI層からV層までの5層に大きく分けることができる。ただし、A-2区①は、水田耕作地のため、上層2層を他の層と区別するためI・2層とした。また、近年造成用に入れられた山砂は「盛土」とした（第3図）。I～V層のうち、遺構が検出できた面はIV層とV層上面である。この遺構検出面までは現表土から概ね1m前後で達する。



第3図 基本層序

I層は暗褐色土で、粉碎された貝片や近現代の遺物を含む搅乱層である。

II層は同じく暗褐色土であるが、土器小片や炭化物を含むしまりのある層である。C-2区では、削平を受けたと思われ、このI・II層が存在しない。

III層は暗灰色土で粘りのある土質である。包含する遺物から奈良・平安時代以降の土層と考えられる。C-1区ではこの層にキサゴなどの貝片を含んでいた。

IV層はにぶい黄褐色の粘土層である。この層が検出できるのは、サンプル7地点の内、A-2区②・A-3区・C-2区である。

V層は灰黄褐色土及び青灰色土・緑灰色土で、地山の砂層と考えた。これは、A-1区・B-1区の北側で重機によりこの砂層をさらに掘り進めたが、1m以上この層が続いていることによる。なお、地点によってこの砂層の土色が異なるのは、グラウシ化したためと考えられる。IV層とV層の関係は、IV層の遺構底面を掘り抜くとV層が検出できることからV層の上に堆積した土層と考えられる。

以上のことから、本調査区の遺構検出時の旧地形には、次のような地形が存在したと考えられる。1つは、A-1区・B-1区・B-2区のように遺構面が砂層である地形、2つ目は、A-2区②・A-3区・C-2区のように遺構面が粘土面で、砂層よりもやや高高地である地形、もう一つは、C-1区のように砂層で土地が他よりやや低く、利用度の少ない地形の3種類の微地形である。

注1 土屋治雄 2005「木更津市田向遺跡」財団法人千葉県文化財センター

2 小高幸男 1999「千葉県木更津市 高砂遺跡Ⅱ」財団法人君津都市文化財センター

3 小林清隆 1998「木更津市水深遺跡」財団法人千葉県文化財センター

4 財団法人君津都市文化財センター 1999「君津都市文化財センター 年報16-平成9年度-」

5 安藤道由 1999「木更津市内遺跡発掘報告書-金鉢塚古墳・椿古墳群・松山遺跡-」財団法人君津都市文化財センター

6 小林清隆 2001「木更津市四宝塚遺跡」財団法人千葉県文化財センター

7 土屋陽子 1980「東京湾東岸小堀川沖積平野の地形発達史」「お茶の水地理21」お茶の水女子大学地理学教室

第2章 検出した遺構と遺物

第1節 遺構と出土遺物

田向遺跡(2)で検出された遺構は、掘立柱建物跡6棟、土坑4基、溝状遺構29条、ピット29基、その他の遺構1基である。遺物は9世紀の土師器・須恵器を中心に、古墳時代前期から近世までの遺物が出土している。

1 掘立柱建物跡

SB-001～006の遺構番号は、整理段階で新たに付した番号であり、現地で作成した図面には柱穴個々に遺構番号が付してあった。これは、現場において建物を構成する柱穴を明確に把握できなかったためであり、整理作業を行う中で、図面に基づいて柱穴の形状・配置・埋土等を再検討して6棟の掘立柱建物跡を想定した。

SB-001 (遺構: 第4図、図版3・8)

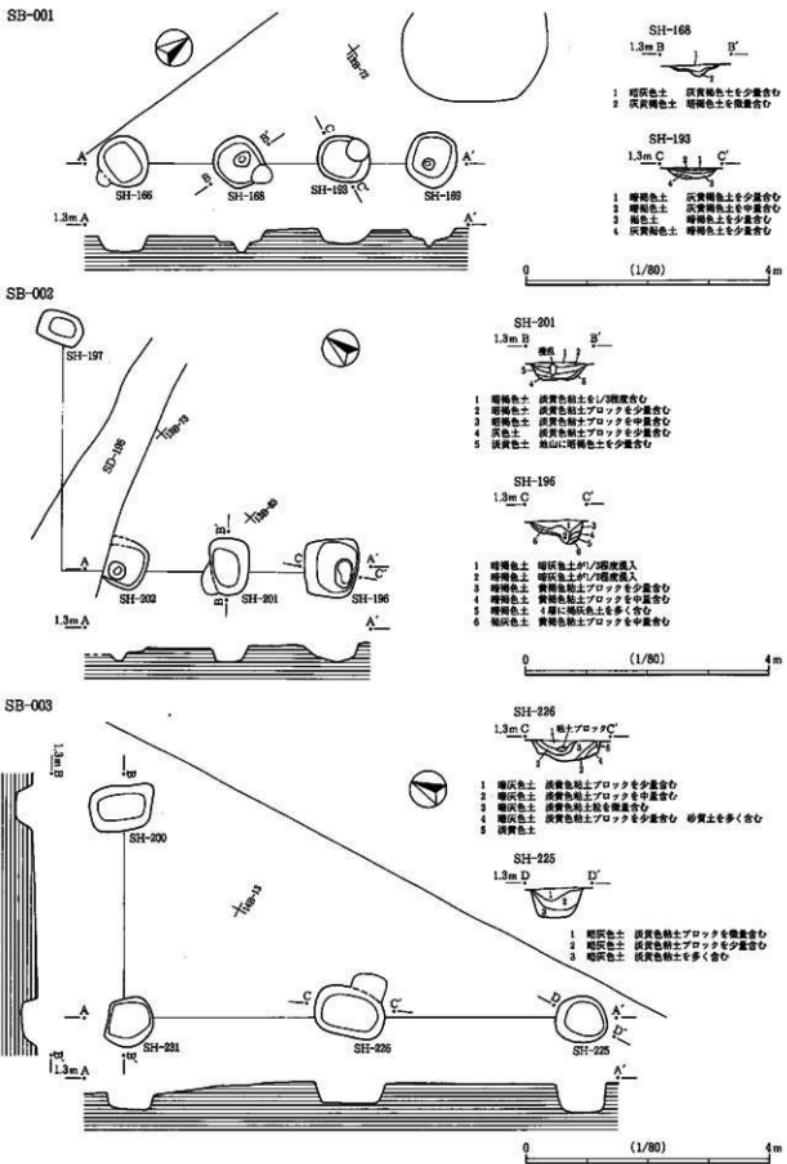
A-1区、12B-62～91グリッドにSH-166・168・169・193の4基の柱穴が並ぶ。柱穴は灰黄褐色土の砂層を掘込む形で検出した。柱間は、SH-166・168・193間がそれぞれ1.8m、SH-169～193間が1.5mであり、軸はN-38°-E方向となっている。柱穴掘形はいずれも径0.8m×0.9mの梢円形で、0.3m前後の深さを持つ。SH-168・169・193には柱跡と思われる掘込みが見られた。柱穴掘形の埋土は暗褐色土を含む褐灰色土である。柱穴の掘形及び配置から考えて掘立柱建物跡の一部と考えられるが、柱列の北西及び南西側が調査区外であり、建物を構成する柱穴が検出できないため、規模は不明である。

4基の柱穴から図示可能な遺物は出土しなかったが、SH-168から壺と杯の一部と思われる土師器小片が出土した。SD-199とほぼ並行に位置しており、同時期と考えたい。

SB-002 (遺構: 第4図、図版3・8、遺物: 第6図、図版9)

A-2区、13B-52～83グリッドにSH-196・197・201・202の4基の柱穴を検出した。柱穴は青灰色土を掘込んでいる。柱穴掘形は、SH-196が径0.9m×1.0m、SH-197が径0.6m×0.8m、SH-201が径0.6m×0.9m、SH-202はSD-195に北側が切られているために全形は不明だが、SH-196に相当する大きさと思われ、いずれも兩丸方形である。SH-196・201・202はそれぞれ1.8m間隔でN-45°-W方向に並ぶ。SH-197はSH-202からN-44°-W方向に半間行って90°折り返し、NE方向3.6mの位置にある。柱穴掘形の埋土はSH-196・201・202は暗褐色～灰色土、SH-197は暗灰色土～褐灰色土である。埋土の相違は上層の堆積土の違いである。柱穴の掘形及び配置から考えて掘立柱建物跡の一部と考えられるが、柱列の南東及び北東側に建物を構成する柱穴が検出できないため、規模は不明である。

SH-201から9世紀中葉の土師器壺が出土しているが、その他の柱穴から図示可能な遺物は出土しなかった。SD-195よりも古い遺構と考える。



第4図 SB-001-002-003

SB-003（遺構：第4図、図版3・8、遺物：第6図、図版9）

A-2区、13B93～14B43グリッドにSH-200・225・226・231の4基の柱穴を検出した。柱穴はにぶい黄褐色粘土を掘込んでいる。柱穴掘形は、SH-200が径0.9m×1.1m隅丸方形、SH-225が径0.8m×0.9mの楕円形、SH-226が径0.8m×1.2mの隅丸方形、SH-231が径0.7m×0.8mの楕円形である。SH-225・226・231は3.6m間隔でN-30°-W方向に並ぶ。SH-200・231は3.6m間隔でN-60°-E方向に並ぶ。柱穴掘形の埋土はSH-200は黒褐色土～暗灰色土、SH-225・226は暗灰色土、SH-231は黒色土である。埋土の相違は上層の堆積土の違いである。柱穴の掘形及び配置から考えて掘立柱建物跡の一部と考えられるが、柱列の南東及び北東側に建物を構成する柱穴が検出できないため、規模は不明である。

SH-200から土師器の甕口縁部が出土している。建物の向きや柱穴の形状からSB-002と同時期と考える。

SB-004（遺構：第5図、図版3・8）

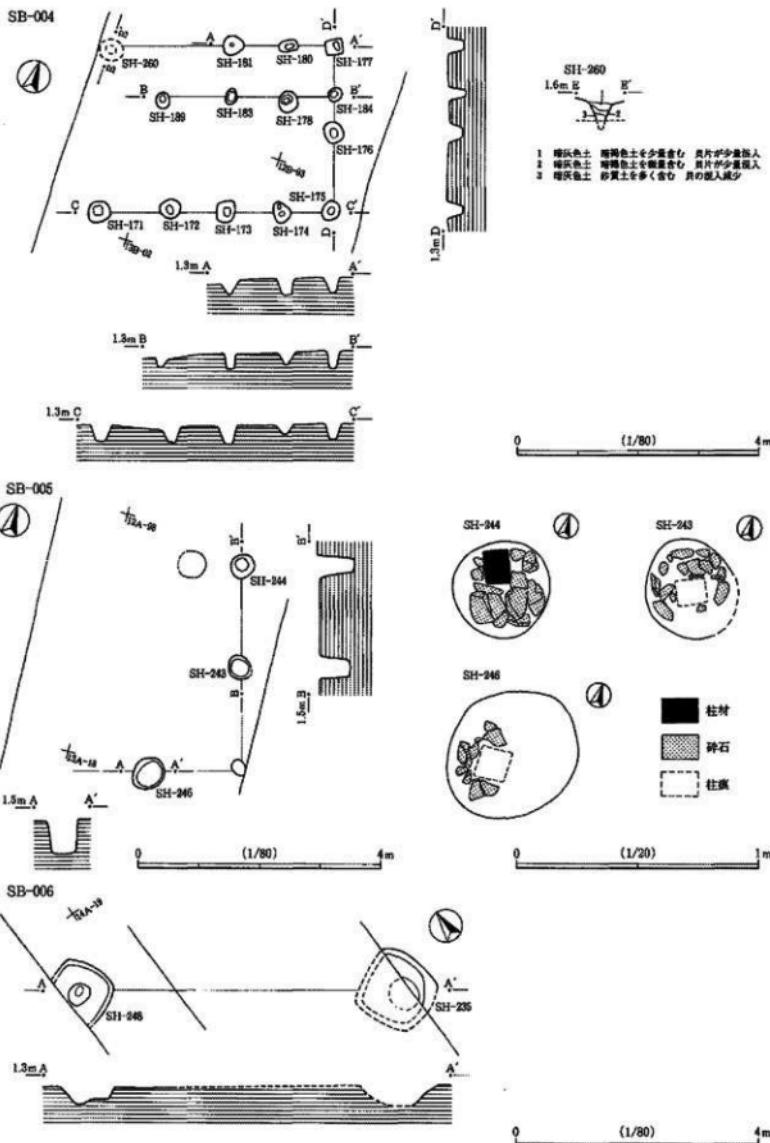
A-1区、12B73～93グリッドにSH-171～178、180・181・183・184・189・260の14基の柱穴を検出した。柱穴掘形は、径0.3m×0.4mの楕円形の小ピットである。柱間は、SH-171・172間、SH-175・176間、SH-183・189間は1.2m、他はすべて0.9m前後の間隔である。建物規模は不明だが、柱列から行方方位はN-70°-E、梁間方位はN-18°-Wとなる建物と思われる。柱穴掘形の埋土はいずれも貝片の混入した暗灰色土である。SD-199の遺構覆土にSH-172・173の2基の柱穴を検出したことから、SB-002はSD-199が埋められてからの遺構である。さらに、A-1区の西側境界で採取したSH-260の断面をみると、現表土下から掘込まれており、近世以降の遺構と考えられる。

図示可能な遺物は出土しなかった。

SB-005（遺構：第5図、図版4・8、遺物：第7図）

16年度調査区、12A-99～13A-18グリッドにSH-243・244・246の3基の柱穴を検出した。遺構検出面は地山の灰黄褐色土の上層である褐灰色土面で検出した。柱穴掘形は、SH-243・244が径0.4mの円形、SH-246が径0.5mの円形である。3基の柱穴とも暗灰色土の埋土に碎石が大量に含まれていた。碎石は遺構検出面から0.1m～0.2m下から柱を囲むように出土した。このような状況から、碎石は砂地に掘られた柱穴に建てた柱を支える裏込め用の石と考えられる。碎石の種類は灰色安山岩が多く、チャートやホルンフェルスも僅かに含まれている。大きさは握り拳大のものが主で、各柱穴とも100個～200個くらいの碎石が使用されていた。碎石の中には擦り痕のあるものも見られた。SH-244では0.10m×0.13m×0.58mの長方形の角柱が併せて出土した。一辺の長い方が北西方向に位置している。柱の加工痕をみると、節を切断した際の擦り痕とその周囲にやや方向の異なる擦り痕が、底部の切断面には鋸引き跡がある。柱の表面は底部も含めて全体が黒く炭化していた。SH-243の底面からも木片が出土しており、出土位置からこの柱も長方形の断面を持ち、長い方を北西方向に向いていることが分かる。柱間はSH-243・244は1.8mでN-14°-W方向に並ぶ。SH-246はSH-243・244の軸方向を南東に1.8m延長し、90°南西に折り返すと1.7mの位置に存在することから掘立柱建物跡の一部と考えられるが、南西及び北西側に建物を構成する柱穴が検出できないため、規模は不明である。

3基の柱穴とも土器は出土していない。建物の向きはSB-004とは同じ方向であり、柱穴の掘込みが暗灰色土からと考えると、中・近世以降の遺構の可能性がある。

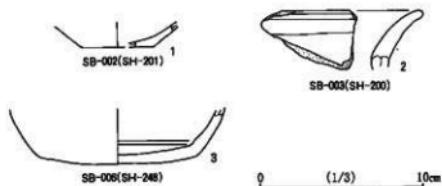


第5図 SB-004・005・006

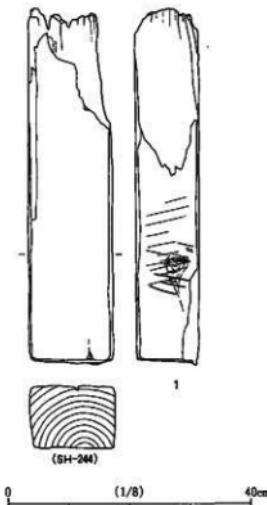
SB-006 (遺構: 第5図、図版8、遺物: 第6図、図版9)

A-2区及び平成16年度調査区、14B-18~30グリッドでSH-235・248の2基の柱穴を検出した。SH-235は西側が調査区外のため全形は不明だが、掘形は一辺1.2mの隅丸方形と思われる。SH-248も西側が調査不能のため、一部しか検出できなかつたが、一辺1.0mの隅丸方形と思われる。掘形埋土は、SH-235が暗褐色土～黒色土、SH-248は黒色土である。柱間は5.4m(3間)で、N-53°W方向に並ぶ。このことから、掘立柱建物跡の一部と考えられ、この柱穴2基の間の調査区外にさらに2基の柱穴の存在する可能性がある。建物の規模は不明である。

SH-235からは遺物は出土していないが、SH-248からは9世紀の土師器の杯が出土した。柱穴の形状や南西方向にあるSD-242・247の溝状構造の方向と建物方向が近似しており、9世紀以降の時期のものと考えられる。



第6図 SB-002・003・006出土遺物



第7図 SB-005出土木製品

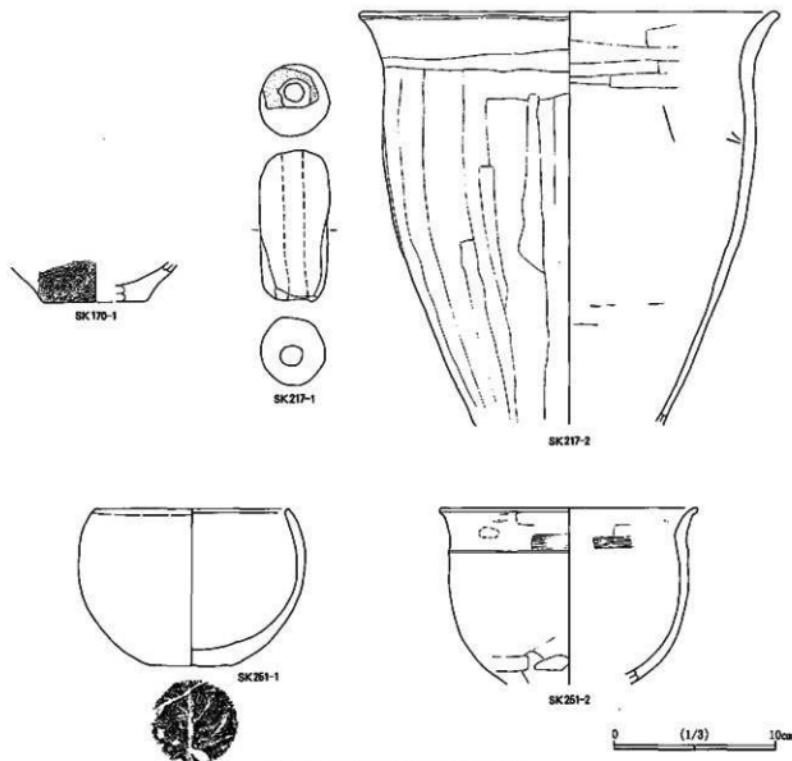
2 土坑

SK-164 (遺構: 第9図)

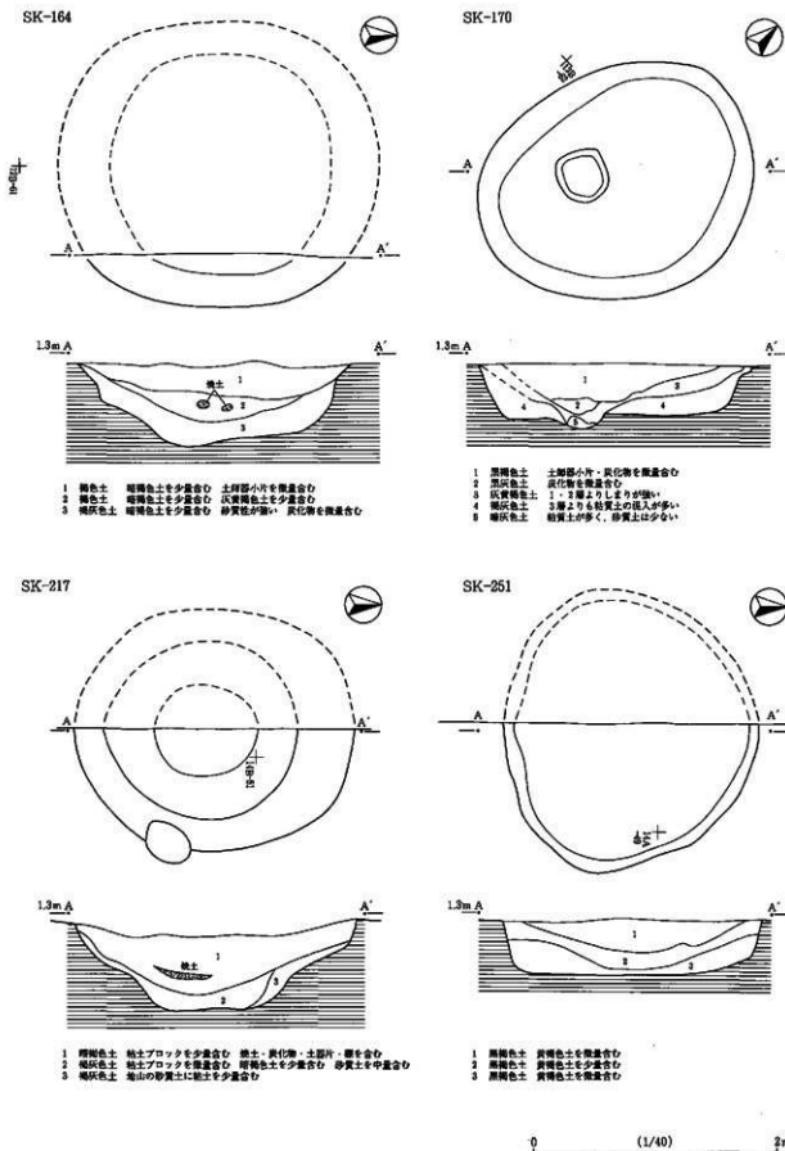
A-1区北、12B-41~42グリッドの調査区西側境界付近で、土坑の一部を検出した。当初は柱穴と考えていたが、遺構全体を推定すると、 $2.2m \times 2.6m$ の楕円状の土坑と考えられる。遺構は灰黄褐色土を掘込んでおり、深さ0.6m、断面逆台形の土坑である。覆土は褐灰色土で、0.3mの深さから焼土を検出した。遺物は土師器を少量出土している。

SK-170 (遺構: 第9図、図版5、遺物: 第8図、図版9)

A-1区北、12B-52~63グリッドに位置する。検出長2.3m、幅0.9m、深さ0.52m、断面逆台形の土坑である。覆土は黒褐色土で、中層から少量の炭化物や焼土を検出した。土坑南西側に径0.4mの浅い掘込



第8図 SK-170・217・251出土遺物



第9図 SK-164-170-217-251

みがあり、暗灰色土が堆積していた。土層断面から考えると、SK-170が埋まった後、何らかの理由で掘られた跡で、炭化物や焼土もその二次使用後の堆積物と考えたい。

出土した土師器の壺底部は、二次使用の際のものと考えられる。

SK-217（遺構：第9図、図版5、遺物：第8図、図版9）

A-2区南、14B-40～51グリッドの調査区西側境界付近で、土坑の一部を検出した。検出幅2.3m、深さ0.7m、断面碗形の土坑である。覆土は暗褐色土で少量の炭化物、土師器、礫を含む。

遺物は覆土中層から土師器の壺が出土している。この壺は「く」の字状口縁で、体部に縱方向のヘラ削りを施している。

SK-251（遺構：第9図、図版5、遺物：第8図、図版9）

16年度調査区中央、14A-38～49グリッドの調査区西側境界付近で、土坑の一部を検出した。検出幅は0.21m、深さ0.5m、断面箱形の土坑である。覆土は黒褐色土である。

遺物は土師器と須恵器が出土している。実測図は土師器の壺と壺を掲載した。壺は半球状で、口縁部は内屈する。底部は平底で木葉痕がみられる。壺は口辺部が横ナデによって低い稜が作られ、胴部との境を形成している。これらの遺物は土坑の中層から下層で出土し、さらに同個体の小片は周辺のグリッドからも出土していることから流れ込みの遺物と考えられる。

3 溝状遺構

平成14年度の調査区は現道両脇であり、平成16年度の調査区は現道部分であったため、検出された溝状遺構はそれぞれの調査区で分断されている。そのため、同一の溝状遺構であっても調査時点ではそれぞれ異なる遺構番号を付けた。本書では同一と思われる遺構についてはまとめて記載したため、遺構番号順にはなっていない。

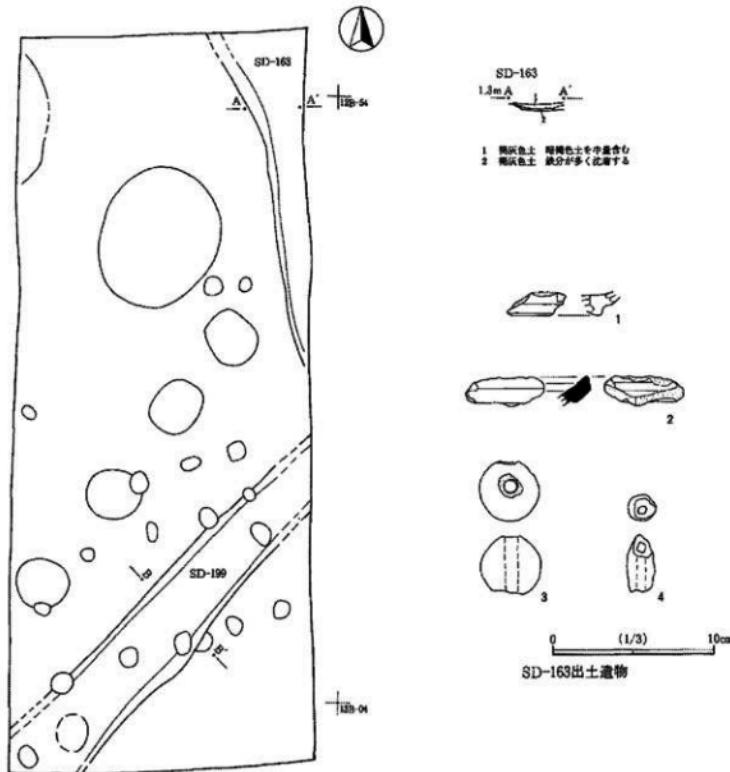
SD-163（遺構：第10図、図版6、遺物：第10図、図版9）

A-1区北、12B-43～73グリッドで検出した溝と思われる遺構の一部である。溝の方位はN-10°-Wで、緩やかに弧を描きながら南東端は調査区外へ続き、北西端は田向遺跡(1)のSD-033A・033Bに続くものと考えられる。溝の検出長5m、深さ0.1mである。覆土は褐灰色土に暗褐色土が中量含まれる。

遺物は土師器と須恵器と土製品が少量出土している。1は、土師器杯の底部で、円盤状の底部から高台をつまみ出し、高台内部は手持ちヘラ削りが施されている。2は、酸化焰焼成された須恵器壺の口縁部である。土製品は土玉と管状土錐である。土師器、須恵器とも9世紀代の遺物と考えられる。

SD-199（遺構：第10図、図版3・6、遺物：第10図、図版9）

A-1区南、12B-83～13B-01グリッドに位置する。溝の方位はN-45°-Eで、北東端は調査区外に続き、南西端は16年度調査区へ続くと思われるが、未検出である。検出長5m、幅1.1m、深さ0.2m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある暗褐色土である。溝の覆土中で検出したSB-004よりも古い遺構である。



第10図 SD-163・199

遺物は、古墳時代後期から平安時代までの土師器と須恵器が少量出土している。1は須恵器杯・2は須恵器壺とともに平安時代の遺物と考えられる。

SD-185（遺構：第11図、図版3）

SD-254（遺構：第11図）

SD-185はA-2区北、13B-22~31グリッドに位置する。溝の方位はN-62°-Eで、北東端は調査区外に続き、南西端はSD-254に続く。検出長1.9m、深さ0.23mで、溝の幅・断面は調査区の境界で検出したため不明である。しかし、底面は平坦で、側壁は底面から60°方向に立ち上がる。覆土はしまりのある暗褐色土である。

遺物は、平安時代の土師器杯片と土師器壺片が僅かに出土している。

SD-254は平成16年度調査区中央北、13A-48~49グリッドに位置する。溝の方位はN-60°-Eで、北東端はSD-185に、南西端は調査区外に続く。検出長1.7m、幅1.4m、深さ0.02mで、地山の青灰色土層に帯状に薄く暗灰色土が堆積している状況で検出した。

遺物は出土していない。

SD-198（遺構：第11図、図版3・6、遺物：第19図、図版9）

SD-250（遺構：第11図）

SD-198はA-2区北、13B-41~43グリッドに位置する。溝の方位はN-75°-Eで緩やかに弧を描いて北東端は調査区外に、南西端はSD-250に続く。検出長3.1m、幅0.6m、深さ0.2m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある褐灰色土で淡黄色粘土ブロックを中量含む。SD-195とはほぼ並行している。遺物は、僅かな土師器片と管状土錐が出土している。

SD-250は平成16年度調査区中央北、13A-59~68グリッドに位置する。溝の方位はN-50°-Eで緩やかに弧を描いて、南西端は調査区外に、北東端のSD-198に続くと考えられる。検出長1.4m、幅0.62m、深さ0.18m、断面逆台形を呈し、覆土はオリーブ灰色土を少量含む黒色土から暗灰色土である。遺物は出土していない。

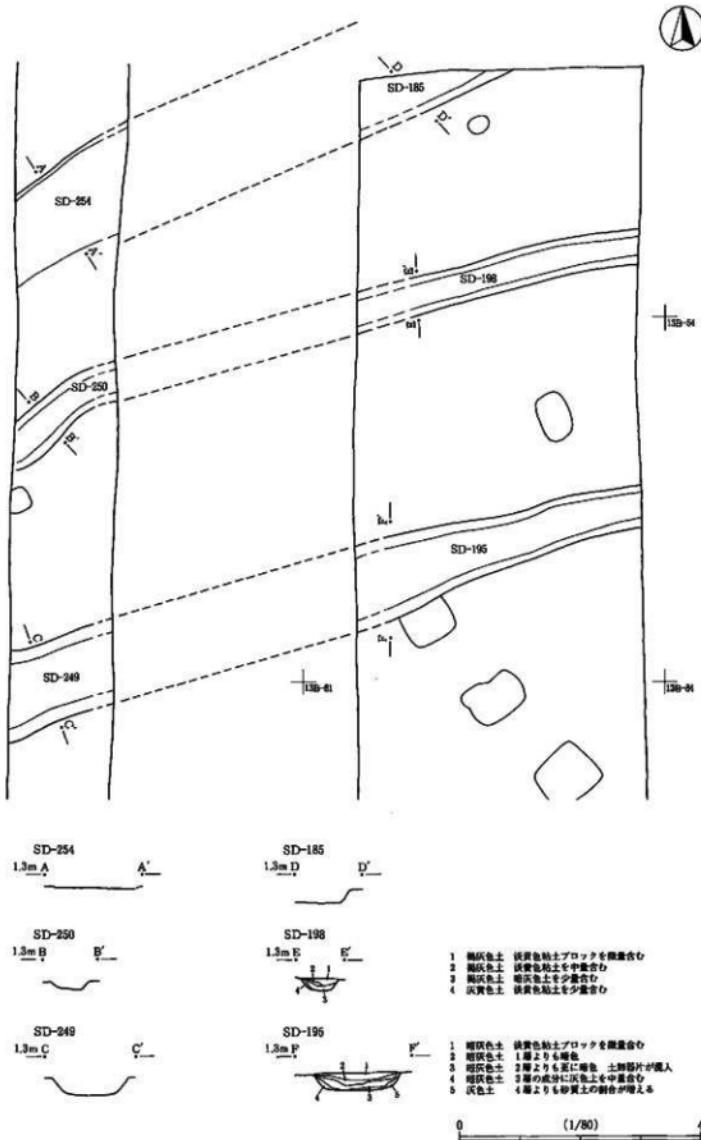
SD-195（遺構：第11図、遺物：第18図、図版9）

SD-249（遺構：第11図、図版7）

SD-195はA-2区北、13B-61~63グリッドに位置する。溝の方位はN-69°-Eで、緩やかに弧を描いて北東端は調査区外に、南西端はSD-249に続く。検出長3.8m、幅1.3m、深さ0.27m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある暗灰色土で、黄色粘土ブロックを含む。南西端付近の溝南側の立ち上がりがSH-202を切っている。SD-198とはほぼ並行している。

遺物は古墳時代終末期の須恵器壺の口縁部と砥石として加工した須恵器片、さらに凹面に布痕、凸面に縄目叩き痕が残る瓦片が出土している。砥石として加工した須恵器と瓦は平安期と考える。

SD-249は平成16年度調査区中央北、13A-88~98に位置する。溝の方位はN-72°-Eで、緩やかに弧を描いて、南西端は調査区外に、北東端はSD-195に続く。検出長1.2m、幅1.2m、深さ0.28m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある黒色土から暗灰色土で、オリーブ灰色土を少量含む。SD-250の覆土と近似



第11図 SD-185・195・198・249・250・254

している。遺物は出土していない。

SD-190（遺構：第12図、図版4・6、遺物：第26図、図版11）

SD-218（遺構：第13図、図版4、遺物：第21図、図版10）

SD-247（遺構：第13図、図版7、遺物：第20図、図版10）

SD-190はA-3区北、15B-32～53グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-20°-Wで、北西端はSD-247・218と続くものと思われる。南東端は攪乱としたが、溝の立ち上がりが消え、黒褐色土が堆積している。SD-192の覆土とも近似するが、SD-192の溝の立ち上がりも不明瞭になる箇所で攪乱とした。おそらくSD-214とも合流する地点であり、溝壁面の決壟も考えられる。検出長3.83m、幅1.06m、深さ0.44m、断面逆台形を呈し、覆土は上層にしまりのある黒褐色粘質土が堆積し、中層に褐灰色粘質土、下層に灰黄褐色土が堆積している。底面の標高は0.76m～0.89mである。遺物は、1が土師器杯の口縁部で、外面に「S」の字に似た墨書きがみえる。2は軽石である。

SD-218はB-2区、14A-44～55グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-40°-Wで、北西端は調査区外へ、南東端はSD-247・190に続くものと思われる。検出長3.30m、幅1.33m、深さ0.15m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある黒色粘質土である。底面の標高は、0.86m～0.89mである。遺物は灰釉陶器小片と軽石が出土している。

SD-247は平成16年度調査区中央南、14A-78～99グリッドに位置し、黄褐色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-42°-Wで、北西端はSD-218に、南東端はSD-190に続くものと思われる。検出長1.7m、幅約2.0m、深さ0.28m、断面逆台形を呈し、覆土はオリーブ灰色土を含むしまりのある黒色土である。底面の標高は0.91m～0.93mである。3条の溝の底面の標高は大きな差なく、方向もほぼ一致している。

遺物は、1が土師器椀の一部で、半球形の体部が口縁部でやや内湾しながら外へ延びている。古墳時代後期と考えられる。2～4は土師器杯で、2・4は体部下端に回転ヘラ削りが施されている。5は、古墳時代中期の甕と考えられる。外面が黒色化している。土師器杯はほぼ9世紀中葉から後葉と考えられる。6は灰釉陶器で、内面に淡い緑色釉がみられる。7は打撃痕のある敲き石である。

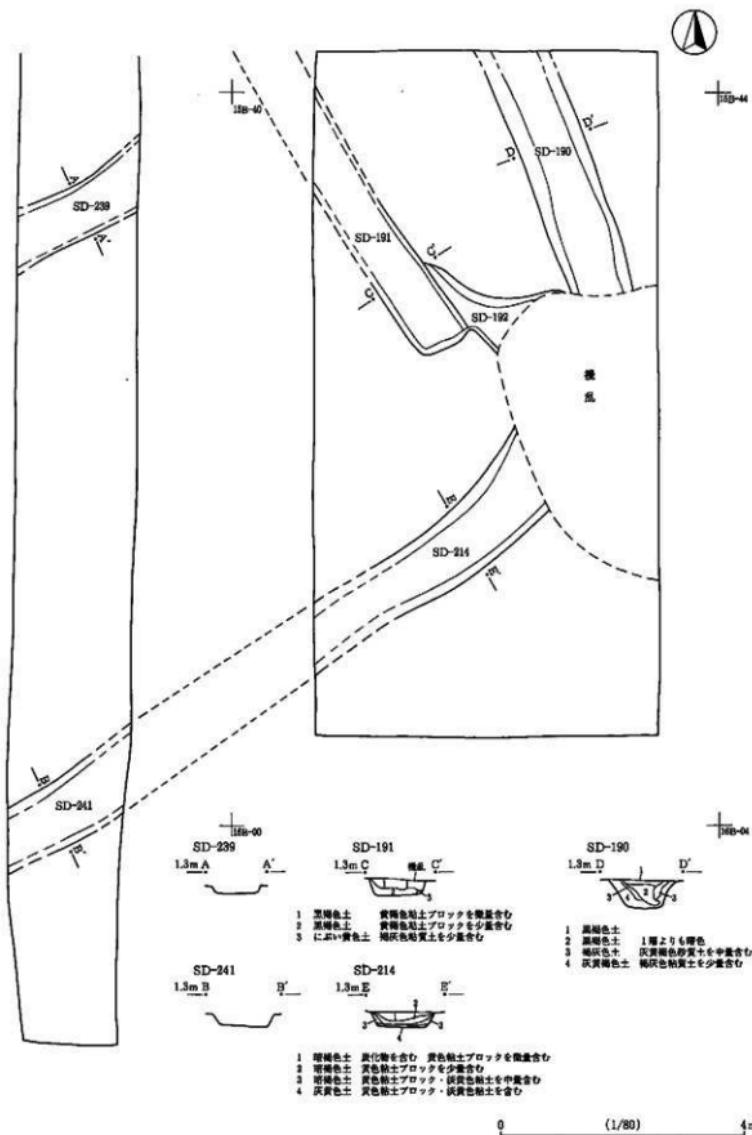
SD-191（遺構：第12図、図版4、遺物：第23図、図版10）

SD-219（遺構：第13図、図版4・7、遺物：第22図、図版11）

SD-242（遺構：第13図、図版4、遺物：第28図、図版11・12）

SD-191はA-3区、15B-51～61グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-34°-Wで、北西端はSD-242に、南東端は15B-61付近で浅くなっている。SD-192と交わる同溝の底面まで下がっている。検出長2.0m、幅約0.88m、深さ0.28m、断面逆台形を呈し、覆土は黄褐色粘土ブロックを少量含むしまりのある黒褐色土である。底面の標高は0.9m～0.92mである。SD-190とはほぼ並行している。

遺物は、1が土師器椀で、半球形の体部から口縁部が僅かに外反する。古墳時代末期と考えられる。2～4とも土師器杯で、体部下端に回転ヘラ削りが施されている。2は体部外面に「得」と思われる墨書きが見える。2・3・4とも9世紀中葉と思われる。5も土師器杯であるが、円盤状の底部から回転ナデによ



第12図 SD-190・191・192・214・239・241

り高台をつまみ出している。高台内は手持ちヘラ削りが施されている。9世紀末葉～10世紀初頭と考えられる。

SD-219はB-2区、14A-44～65グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-36°-Wで、北西端は溝の立ち上がりが希薄となって途切れる。南東端はSD-242へ続く。検出長5.4m、幅約0.79m、深さ0.12m、断面逆台形を呈し、覆土は黄褐色粘土ブロックを少量含むしまりのある黒色土である。底面の標高は0.87m～1.01mである。SD-218とほぼ並行している。

遺物は、1が礎化焰焼成した須恵器杯で、体部は浅く、口縁部は僅かに外反する。底部は回転糸切り痕が見える。9世紀後葉と考えられる。2は土師器杯で、体部下端に回転ヘラ削りを施している。9世紀前葉と考えられる。3は土師器壺だが、色調は内外面とも灰白色を呈している。口縁部は、短く強く外反している。古墳時代前期と考えられる。

SD-242は平成16年度調査区中央南、15A-08～29グリッドに位置する。溝の方位はN-45°-Wで、北西端はSD-219へ続く。南東端はSD-191へ続く。検出長2.2m、幅約1.5m、深さ0.11m、断面逆台形を呈し、覆土は黄褐色粘土ブロックを微量含むしまりのある黒褐色土である。底面の標高は0.96m～1.05mである。SD-247とほぼ並行している。

SD-242は検出した溝の中でもっと多くの遺物を出土している。1～6は土師器杯で、1は体部は直線的に開き、下端に回転ヘラ削りを、底部は回転糸切り後にヘラ削りを施している。2～5は体部が内湾して開く。6は体部が直線的に開き、下端に回転ヘラ削りを、底部は回転糸切り後ヘラ削りを施している。7はSD-219の1の遺物と器形、技法とも酷似している須恵器杯である。1～3が9世紀中葉、4が9世紀後葉、5が9世紀末葉～10世紀初頭と考えている。8～19は土師器壺で、口辺部が「く」の字状をしており、口縁部を斜めまたは上方につまみ上げている。9～11・13・14は、体部に縱方向のヘラ削りが施されている。15～18は口辺部の立ち上がりが短くゆるやかに外反する小型の土師器壺である。15・17には体部に縱方向のヘラ削りが施されている。19は口辺部がやや開いた「コ」の字状を呈している。11・19に指頭圧痕が見える。ほぼ9世紀のものと考える。20は平行叩き目文のある須恵器壺、21は手付小瓶と思われる体部で、外面に淡いオリーブ色に発色した釉がみえる。下部は露胎である。9世紀後半と考える。22は古代の瓦で、厚さは0.26mである。凹面には布目痕と布端のほつれ痕が、凸面には格子目の叩き板で叩いた痕跡が見える。23は管状土錐である。

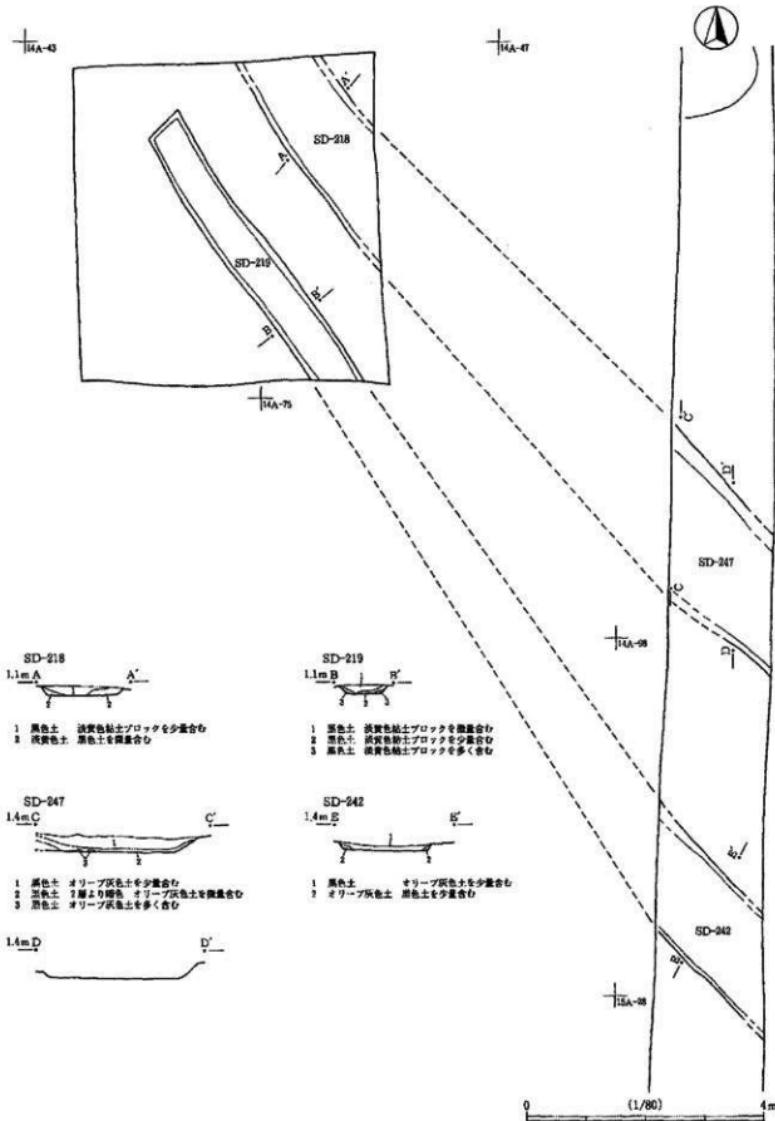
SD-192（遺構：第12図、図版4）

A-3区、15B-51～62グリッドに位置する。溝の方位はN-72°-Wでやや湾曲している。北西端はSD-191と接し、その壁面を切っている。南東端はSD-190の手前で明確な形狀がつかめなくなる。検出長2.1m、幅約0.5m～1.0m、深さ0.18m、断面や底面は一定ではない。特に溝の東側はSD-190とSD-214の合流により、広く擾乱を受けているものと思われる。

図示可能な遺物は出土していないが、土師器の杯や壺の小片が出土している。

SD-239（遺構：第12図、遺物：第25図・図版11）

平成16年度調査区南、15A-48～59グリッドに位置する。溝の方位はN-60°-Eでゆるやかな弧を描き、両端は調査区外に続く。覆土はしまりのある黒色土である。検出長1.9m、幅約0.8m、深さ0.1m前後と思



第13図 SD-218-219-242-247

われる。地山のオリーブ灰色土から水が湧き出てしまい、完掘できなかった。

図示可能な遺物は出土していないが、須恵器小片が出土している。

SD-214（遺構：第12図、図版6、遺物：第24図、図版10）

SD-241（遺構：第12図）

SD-214はA-3区南、15B-62～71グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-51°-Eで緩やかに弧を描いている。南西端はSD-241へ続き、北東端はSD-190・192方向へ続くと思われるが、溝の立ち上がりがなくなる。これは、SD-192に切られているものなのか、擾乱なのかは判別できない。検出長3.40m、幅1.18m、深さ0.24m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある暗褐色土で、黄色粘土ブロックを少量含む。底面の標高は0.72m～0.83mである。

遺物は土師器片と須恵器小片（未掲載）が出土している。1は土師器杯で、体部下端に回転ヘラ削りを施している。9世紀前葉と考えられる。2は土師器壺で、内面にやや光沢のある付着物が見られるが、成分分析をしていないため詳細は不明だが、漆の可能性もある。3は土師器杯の底部で「ハ」の字に開く高い高台を付けている。9世紀末葉から10世紀初頭と思われる。4は土師器壺で、口縁部は強く外反する。口辺部に指頭圧痕が見える。

SD-241は16年度調査区南、15A-98～16A-08グリッドに位置する。溝の方位はN-56°-Eで緩やかに弧を描いて、北東端はSD-214へ続き、南西端は調査区外へ続く。検出長1.80m、幅1.02m、深さ0.20m、断面逆台形を呈しているものと思われる。地山面で遺構を検出したが、水が激しく湧いてきて完掘は断念し、溝中央部に幅0.25mのトレンチを入れて底部までの深さを確認した。覆土はしまりのある黒色土である。底面の標高は0.79mである。

遺物は出土していない。

SD-215（遺構：第14図、図版4）

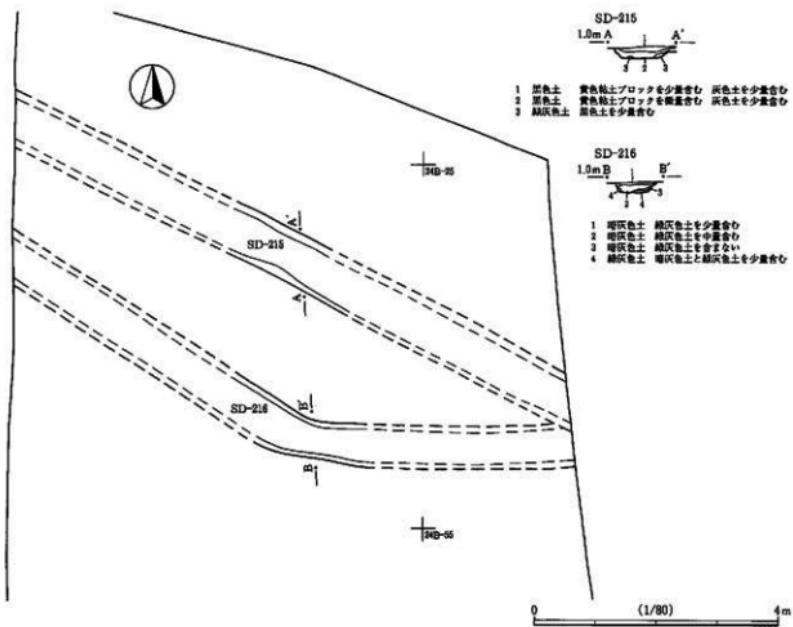
C-1区、24B-23～34グリッドに位置する。溝の方位はN-63°-Wではほぼ直線上に延びる。両端は調査外へ続く。検出長2.12m、幅0.76m、深さ0.32m、断面逆台形を呈する。地山からの激しい湧水のため、溝の方向を確認するのみの調査となった。覆土は黒色土である。

遺物は出土していない。

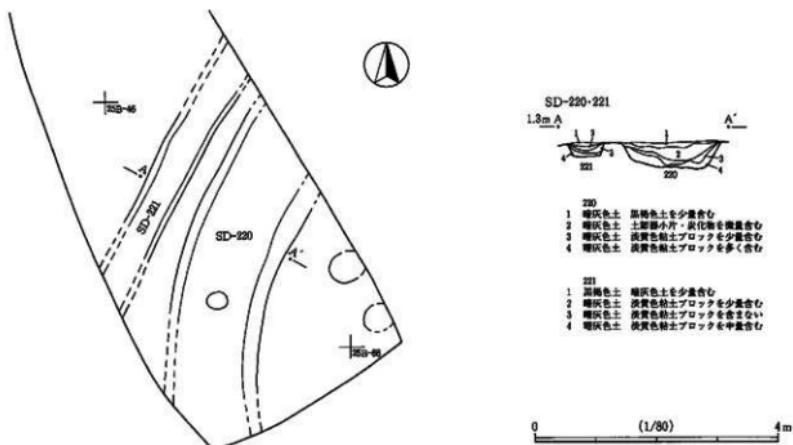
SD-216（遺構：第14図、図版4）

C-1区、24B-33～44グリッドに位置する。溝の方位はN-61°-Wで緩やかに湾曲しており、北西端は調査区外へ、南東端はSD-215に交わるものと思われる。検出長1.92m、幅0.76m、深さ0.32m、断面逆台形を呈する。地山からの激しい湧水のため、溝の方向を確認するのみの調査となった。覆土は暗灰色土である。調査区東側の断面を見ると、暗灰色土の下に黒色土が堆積をしており、SD-216の方が新しい溝と考えられる。

図示可能な遺物は出土していないが、土師器小片が1点出土した。



第14図 SD-215-216



第15図 SD-220-221

SD-220（遺構：第15図、図版4、遺物：第27図、図版11）

C-2区、25B-47～56グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-17°-Eで緩やかに弧を描きながら、両端とも調査区外へ続く。検出長3.18m、幅1.52m、深さ0.40m、断面逆台形を呈し、覆土はしまりのある暗灰色土で淡黄色粘土ブロックを少量含む。溝内南西側底面よりSH-222を検出した。湧水のため詳細は不明である。

遺物は、1が酸化焰焼成した須恵器壺の体部で、外面に平行叩き目文が見られる。2は須恵器壺の口縁部で、外面に灰オリーブ色の自然釉が見られる。3は管状土錐である。その他、土師器の小片が多く出土した。

SD-221（遺構：第15図、図版4）

C-2区、25B-37～56グリッドに位置し、淡黄色粘土層で検出した溝状遺構である。溝の方位はN-28°-Eで、両端とも直線上に調査区外へ続く。検出長3.32m、幅0.58m、深さ0.22m、断面箱形を呈し、覆土は黒褐色土が暗灰色土の上層に堆積しており、暗灰色土にはSD-220と同様に淡黄色粘土ブロックを少量含む。同様の覆土が堆積していることから同時期の遺構と考えられる。

図示可能な遺物は出土していないが、土師器小片が僅かに出土している。

SD-203・207・208・209（遺構：第16図、図版3・6）

SD-203は、B-1区北、12A-52～63グリッドに位置する。平面図ではSH-205を挟んで2条に分断しているようにみえるが、掘込みの浅い溝のため同一の遺構と考えた。溝の方位はN-38°-Wで、北西端はこの面で切れるのかさらに続くのかは不明である。南東端は調査区外へ続く。検出長5.18m、幅0.38m、深さ0.05m、断面皿形を呈し、覆土は黒褐色土である。底面は平坦ではない。

遺物は土師器小片が出土している。

SD-207は、B-1区北、12A-83～93グリッドに位置する。溝の方位はN-29°-Wで、両端ともこの面で切れる。検出長2.88m、幅0.36m、深さ0.13m、断面皿形を呈し、覆土は黒褐色土である。底面は平坦ではない。

遺物は出土していない。

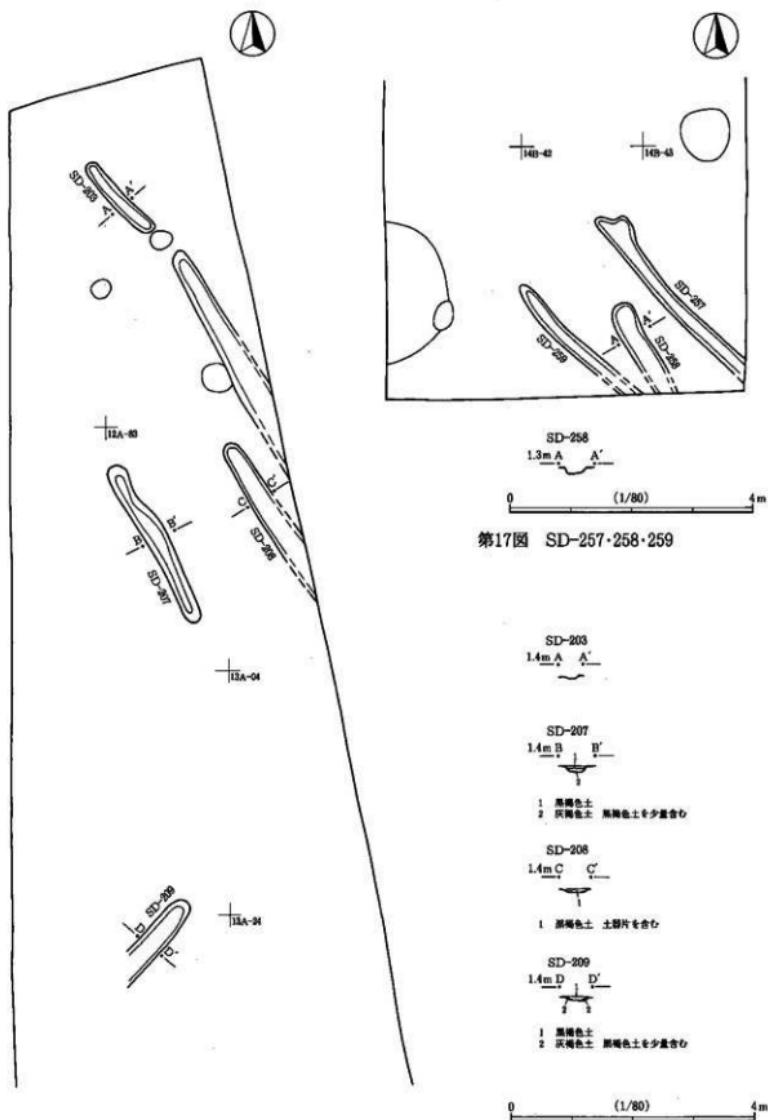
SD-208は、B-1区北、12A-83～94グリッドに位置する。溝の方位はN-36°-Wで、北西端はこの面で切れるが、南東端は調査区外へ続く。検出長2.14m、幅0.40m、深さ0.05m、断面皿形を呈し、覆土は黒褐色土である。底面は比較的平坦である。

遺物は土師器小片が出土している。

SD-209は、B-1区南、13A-13～23グリッドに位置する。溝の方位はN-42°-Eで、北東端はこの面で切れるが、南西端は調査区外へ続くものと思われる。検出長1.58m、幅0.38m、深さ0.05m、断面皿形を呈し、覆土は黒褐色土である。底面は比較的平坦である。

遺物は、出土していない。

これら4条の遺構は、溝の形状が似ており、覆土も同一である。また、溝の方位はSD-203・207・208はほぼ同一方向に対して、SD-209はほぼ垂直方向を呈している。底面に耕作痕は見られないが、形状から畠の歎溝の可能性がある。



第16図 SD-203・207・208・209

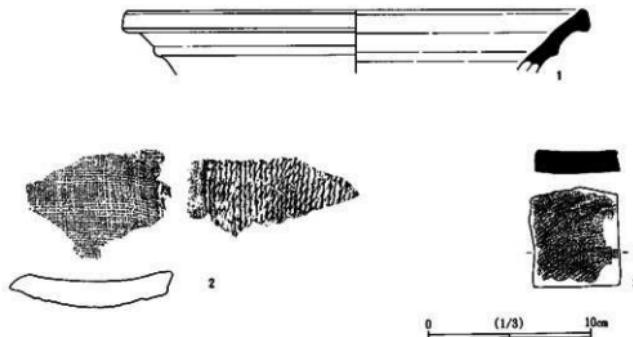
SD-257・258・259（遺構：第17図、図版4）

SD-257は、A-2区南、14B-42～53グリッドに位置する。溝の方位は、N-43°-Wで、北西端はこの面で切れるが、南東端は調査区外へ続く。検出長3.47m、幅0.27m、深さ0.04m、断面皿形を呈し、覆土は暗褐色土である。底面は平坦ではない。遺物は出土していない。

SD-258は、A-2区南、14B-52～53グリッドに位置する。溝の方位は、N-28°-Wで、北西端はこの面で切れるが、南東端は調査区外へ続く。検出長1.28m、幅0.37m、深さ0.04m、断面皿形を呈し、覆土は暗褐色土である。底面は平坦ではない。遺物は出土していない。

SD-259は、A-2区南、14B-52グリッドに位置する。溝の方位はN-44°-Wで、北西端はこの面で切れるが、南東端は調査区外へ続く。検出長2.04m、幅0.27m、深さ0.03m、断面皿形を呈し、覆土は暗褐色土である。底面は比較的平坦である。遺物は出土していない。

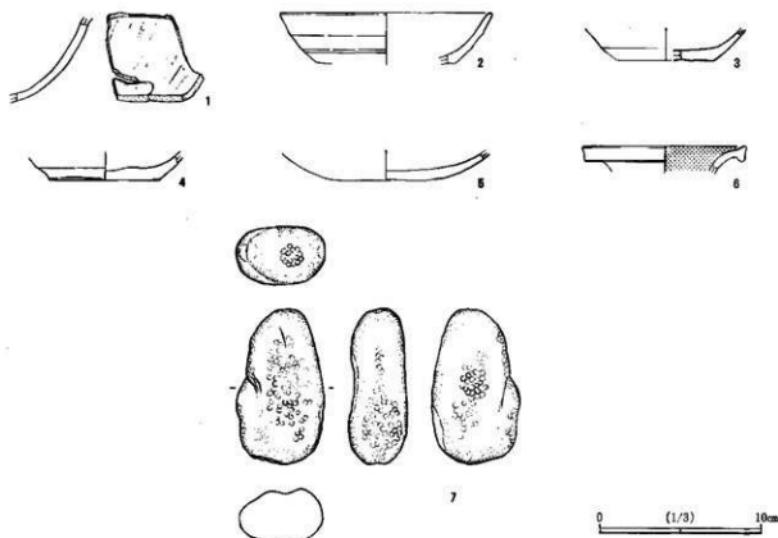
これら3条の遺構は、溝の形状が似ており、覆土も同一である。また、溝の方位もほぼ同一方向である。底面に耕作痕は見られないが、形状から畠の畝溝の可能性がある。



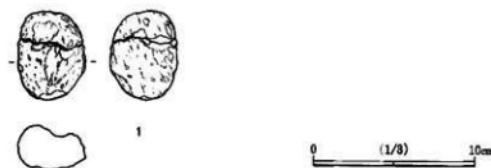
第18図 SD-195出土遺物



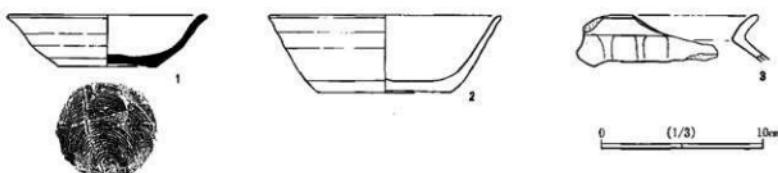
第19図 SD-198出土遺物



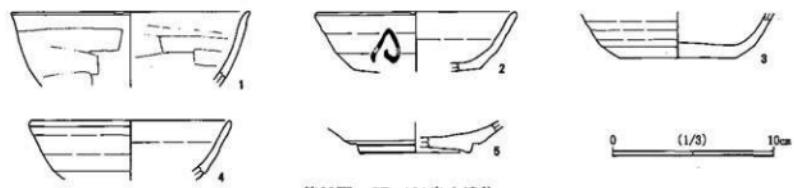
第20図 SD-247出土遺物



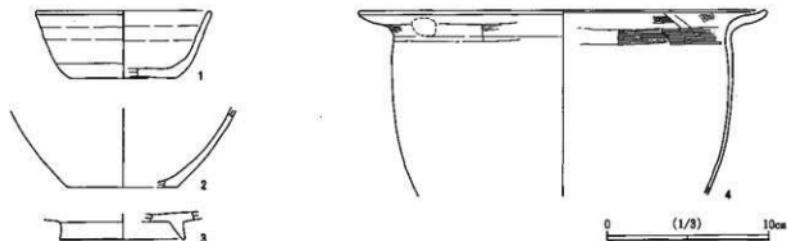
第21図 SD-218出土遺物



第22図 SD-219出土遺物



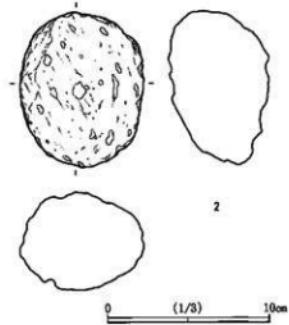
第23図 SD-191出土遺物



第24図 SD-214出土遺物



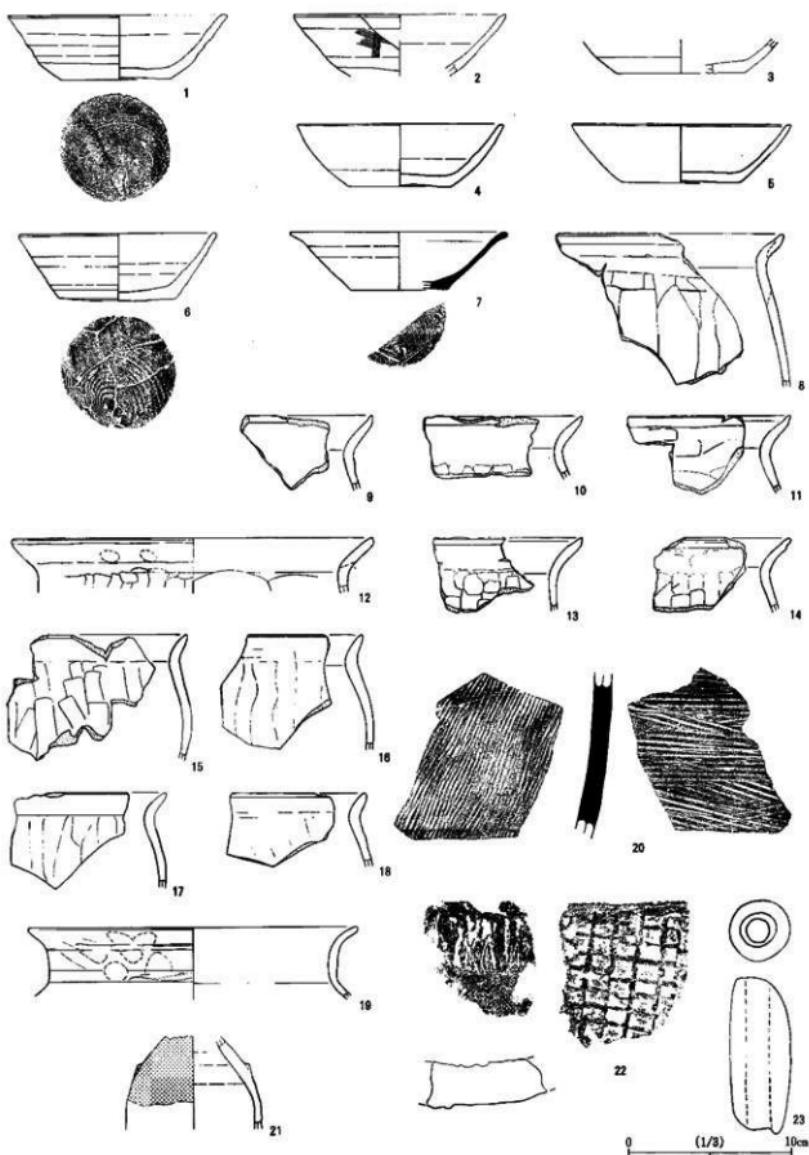
第25図 SD-239出土遺物



第26図 SD-190出土遺物



第27図 SD-220出土遺物



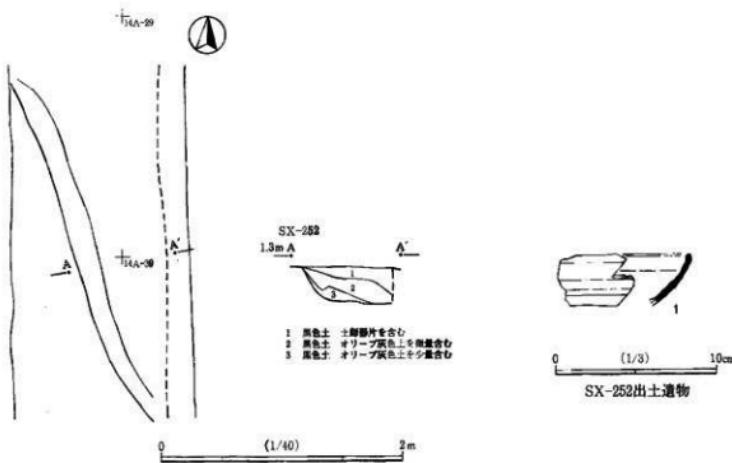
第28図 SD-242出土遺物

4 その他の遺構

S X - 2 5 2 (遺構: 第29図, 図版5, 遺物: 第29図, 図版11)

平成16年度調査区中央南, 14A-28~39に位置し, 黄褐色粘土層が途切れる北端で, 一辺がN-24°-Wの方位を持つ遺構を検出した。検出長3.04m, 深さ0.30m, 約40°の角度で底面から立ち上がる。検出した遺構の北側には立ち上がりは検出できない。底面は比較的平坦である。覆土は黒色土, オリーブ灰色土を少量含む。この遺構の北側は地山が青灰色砂質土となり, その上に暗灰色土が堆積しており, この遺構が溝状に続くとは考えられない。

遺物は1が須恵器杯で, 体部は内湾しており, 口縁部で垂直に立ち上がる。その他, 土師器・須恵器小片が少量出土している。



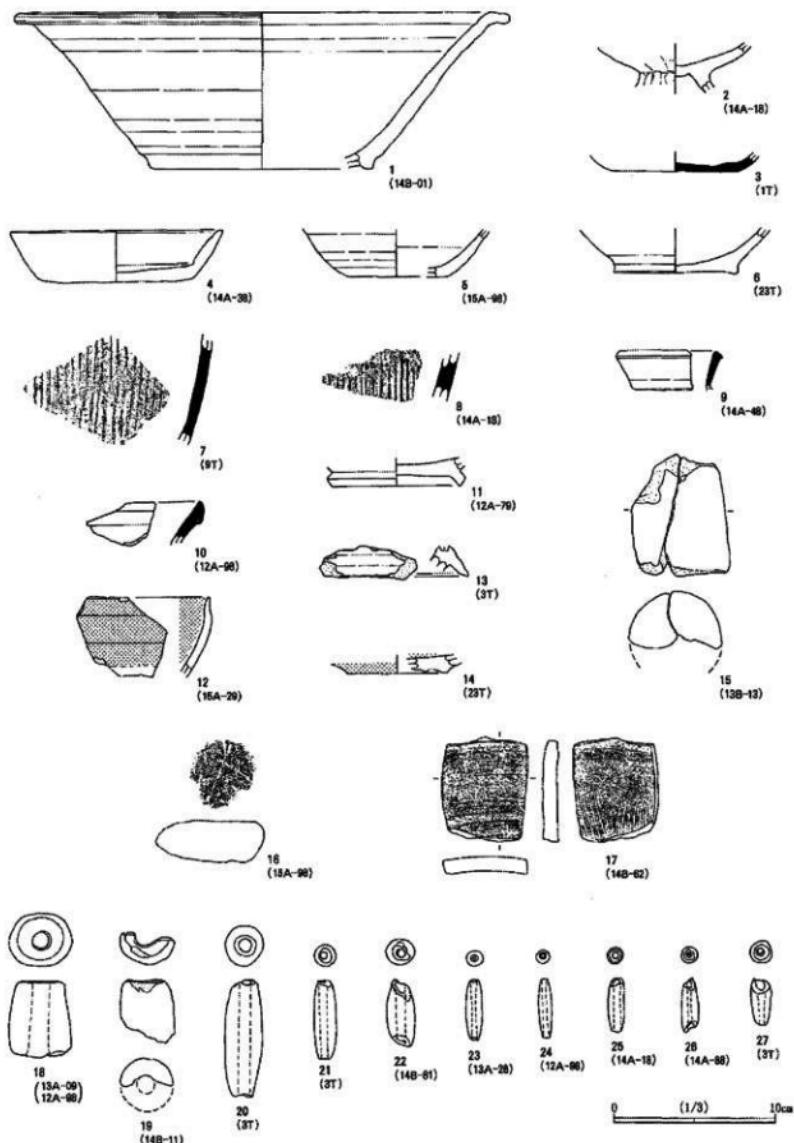
第29図 SX-252

第2節 遺構外出土遺物（第30図 図版12・13）

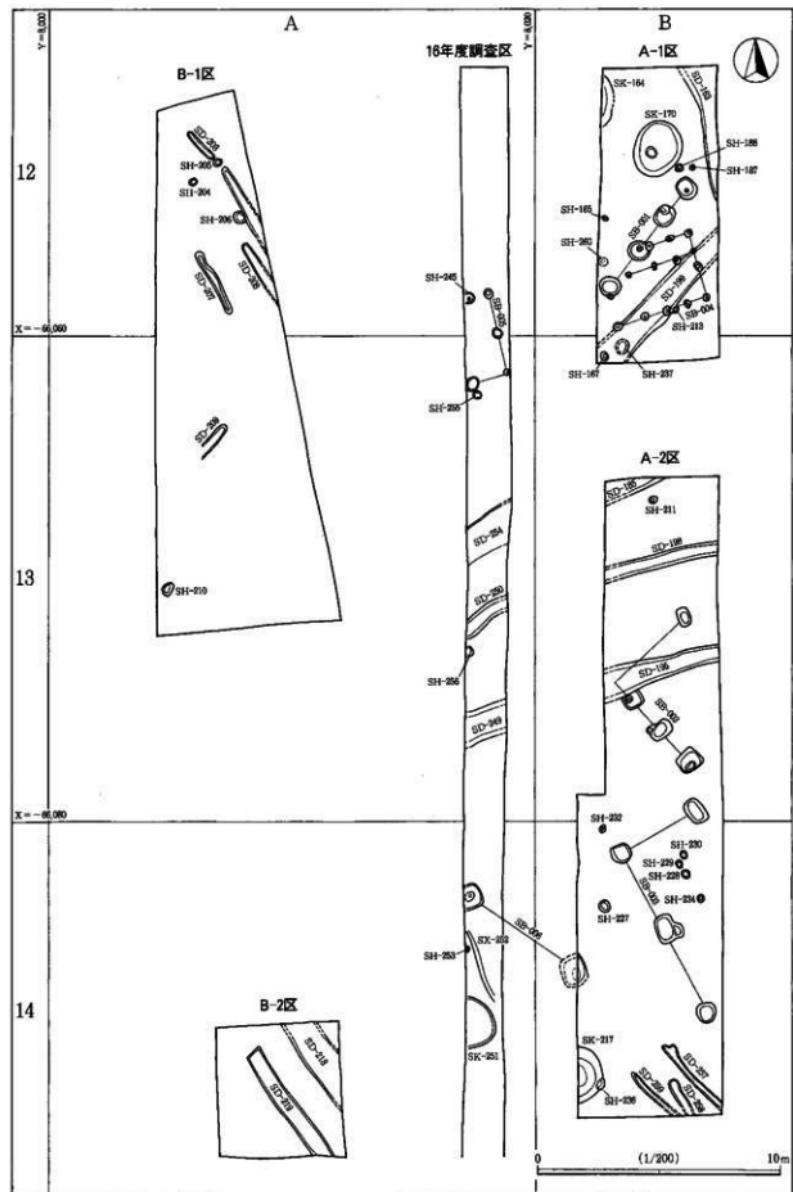
ここでは、確認調査・本調査を通して、遺構外から出土した遺物をまとめて掲載する。確認調査においては出土したトレンチ名を、本調査においてはグリッド名を挿図中に記した。

1は陶器鉢で、全体の20%が遺存し、焼成は良好である。色調は胎土が灰色、外面内面とも無釉で灰白色を呈している。体部は直線的に立ち上がり、口縁部が水平方向に外反する。高台は付高台で、高台内部は回転ヘラ削りが施されている。2は古墳時代後期の高杯の一部である。3は酸化焰焼成した須恵器杯で、底部外面は回転ヘラ削りが施されている。胎土に雲母と褐色粒が多く含まれる。4は遺存30%程度の土師器杯で、底形が大きく、器高の低いものである。5は土師器杯で、小片である。体部はやや内湾している。6はにぶい橙色をした土師器杯で、円盤状の底部を回転ナデにより高台をつまみ出している。7・8は酸化焰焼成による須恵器壺の一部で、外面は7は黒褐色を、8はにぶい橙色を呈している。外面に平行叩き目文がみられる。9は須恵器瓶、10は須恵器壺でいずれも口縁部である。11は陶器の底部である。12は天目で、体部は丸みを帯び、口唇部はほぼ直立して端部が尖る。内外両面に鉄軸が施されている。15世紀後半と思われる。13は灰釉陶器の甕口唇部で、内面に自然釉が見える。常滑かと思われる。14は高台付き瀬戸皿の底部であり、全面に釉薬が施されており、16世紀代と思われる。15は支脚である。16は瓦で、四面に布痕が見られる。17は瀬戸系陶器の擂り鉢の体部を磁石として二次使用したものである。擂り鉢の内面には擂り目の条線が施されており、内外両面に鉄軸がかけられている。胎土に多くの黒色粒子が含まれている。磁石としての使用面は両側面で、表面はかなり滑らかで、やや丸みを帯びている。皮革製品に使用したものかとも思われる。

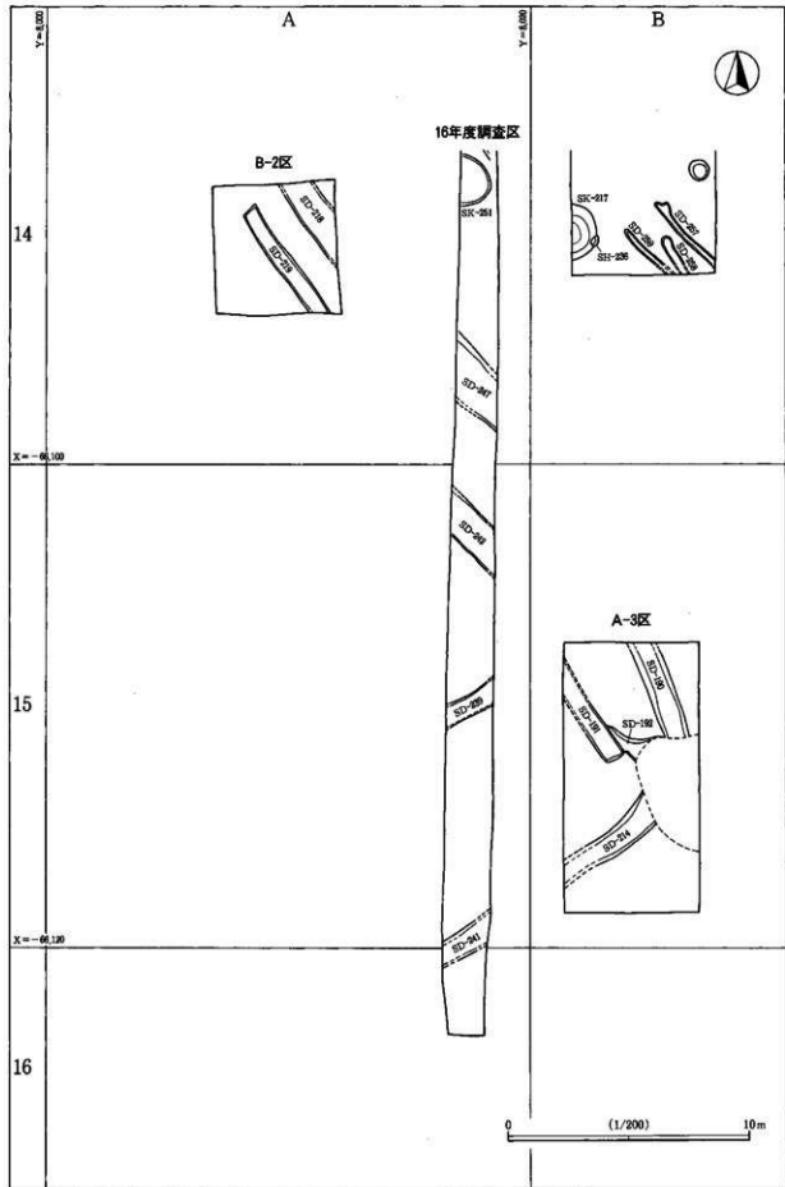
18~27は管状土錐である。18は最大径3.8cmで破損箇所が黒色化している。19は径3.3cmと思われるもので、表面の一部黒色化している。20・21はほぼ完形のもので、20は最大径2.5cm、長さ7.2cm、21は最大径1.4cm、長さ4.8cmである。22は最大径1.8cmである。23・24はほぼ完形に近いもので、23が最大径1.0cm、長さ3.8cm、24が最大径0.8cm、長さ3.7cmである。25~27はそれぞれ最大径は1.0cm、1.1cm、1.4cmである。



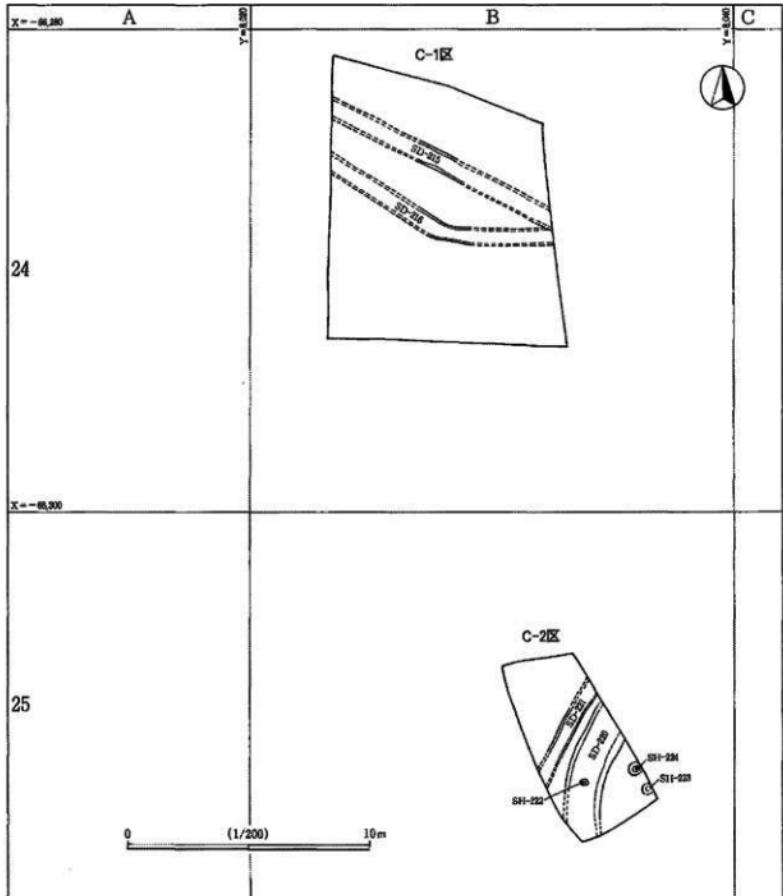
第30図 造橋外出土遺物



第31図 遺構全体図(1)



第32図 遺構全体図(2)



第33図 遺構全体図(3)

第2表 造様一覧表

地区	調査件数	調査対象名	造様種類	時代	大きさ(m)	渡さ(m)	所在グリッド	備考
A-1	SD-1 63	SD-1 63	現状遺構	平安時代	5.00	0.10	1 2 B-4 3 ~ 7 5	
A-1	SH-1 64	SK-1 64	土塹	現良・平安時代	2.20×3.66		1 2 B-4 1 ~ 4 2	
A-1	SH-1 65	SH-1 65	ピット	現立柱建物跡柱穴	0.18×0.20	0.11	1 2 B-7 1	
A-1	SH-1 66	SB-0 01	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.25	1 2 B-8 1 ~ 9 1	
A-1	SH-1 67	SH-1 67	ピット		0.30×0.42	0.10	1 3 B-0 1	
A-1	SH-1 68	SB-0 01	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.28	1 2 B-8 2	
A-1	SH-1 69	SB-0 01	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.29	1 2 B-6 3 ~ 7 3	
A-1	SH-1 70	SK-1 70	土塹	現良・平安時代	2.30×0.90	0.52	1 2 B-5 2 ~ 5 3	
A-1	SH-1 71	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.38×0.34	0.26	1 2 B-9 1	
A-1	SH-1 72	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.34×0.38	0.26	1 2 B-9 2	
A-1	SH-1 73	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.38×0.30	0.31	1 2 B-9 2	
A-1	SH-1 74	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.36×0.26	0.16	1 2 B-9 3	
A-1	SH-1 75	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.32×0.28	0.26	1 2 B-9 3	
A-1	SH-1 76	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.36×0.30	0.23	1 2 B-8 3	
A-1	SH-1 77	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.34×0.25	0.25	1 2 B-7 3	
A-1	SH-1 78	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.36×0.30	0.20	1 2 B-8 2	
A-1	SH-1 79	SH-1 79	ピット		0.22×0.30	0.30	1 2 B-9 1	
A-1	SH-1 80	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.33×0.18	0.28	1 2 B-8 2	
A-1	SH-1 81	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.34×0.30	0.26	1 2 B-8 2	
久喜	182	-	-	-	-	-	-	-
A-1	SH-1 83	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.28×0.30	0.24	1 2 B-8 2	
A-1	SH-1 84	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.34×0.28	0.26	1 2 B-9 3	
A-2	SD-1 85	SD-1 85	現状遺構	平安時代	1.90	0.23	1 3 B-22 ~ 3 1	
A-1	SH-1 86	SH-1 86	ピット		0.35×0.41	0.35	1 2 B-7 2	
A-1	SH-1 87	SH-1 87	ピット		0.17×0.20	0.21	1 2 B-6 2	
A-1	SH-1 88	SH-1 88	ピット		0.28×0.35	0.17	1 2 B-6 3	
A-1	SH-1 89	SB-0 04	現立柱建物跡柱穴	近世	0.26×0.22	0.14	1 2 B-8 1	
A-3	SD-1 90	SD-1 90	唐破風彌	平安時代	1.05×3.83	0.44	1 5 B-3 2 ~ 5 3	
A-3	SD-1 91	SD-1 91	唐破風彌	平安時代	0.88×1.00	0.28	1 5 B-5 1 ~ 6 1	
A-3	SD-1 92	SD-1 92	唐破風彌	平安時代	0.50~1.00×2.16	0.18	1 5 B-5 1 ~ 6 2	
A-1	SH-1 93	SB-0 01	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.17	1 2 B-7 2	
久喜	194	-	-	-	-	-	-	-
A-2	SD-1 95	SD-1 95	現状遺構	平安時代	1.30×3.80	0.27	1 3 B-6 1 ~ 6 3	
A-2	SH-1 96	SB-0 02	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.30	1 3 B-8 3	
A-2	SH-1 97	SB-0 02	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.42	1 3 B-5 2 ~ 5 3	
A-2	SD-1 98	SD-1 98	現状遺構	平安時代	0.60×3.10	0.20	1 3 B-4 1 ~ 4 3	
A-1	SD-1 99	SD-1 99	現状遺構	平安時代	1.10×3.00	0.20	1 2 B-8 3 ~ 1 3 B-6 1	
A-2	SH-2 00	SD-0 03	現立柱建物跡柱穴	平安時代	1.14×0.72	0.27	1 3 B-9 3	
A-2	SH-2 01	SD-0 02	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.24	1 3 B-8 2 ~ 8 3	
A-2	SH-2 02	SD-0 02	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.21	1 3 B-7 1 ~ 7 2	
B-1	SD-2 03	SD-2 03	唐破風彌		0.36×5.18	0.05	1 2 A-5 2 ~ 6 3	鉄床か
B-1	SH-2 04	SH-2 04	ピット		0.30×3.35	0.12	1 2 A-6 2	
B-1	SH-2 05	SH-2 05	ピット		0.32×0.38	0.07	1 2 A-6 3	
B-1	SH-2 06	SH-2 06	ピット		0.45×0.50	0.08	1 2 A-7 3	
B-1	SD-2 07	SD-2 07	深状遺構		0.38×2.88	0.13	1 2 A-5 3 ~ 9 3	鉄床か
B-1	SH-2 08	SD-2 08	深状遺構		0.40×2.14	0.05	1 2 A-8 3 ~ 9 4	鉄床か
B-1	SD-2 09	SD-2 09	深状遺構		0.38×1.58	0.05	1 3 A-1 2 ~ 2 3	鉄床か
B-1	SH-2 10	SH-2 10	ピット		0.38×0.56	0.16	1 3 A-5 2	
A-2	SH-2 11	SH-2 11	ピット		0.25×0.34	0.09	1 3 B-3 2	
久喜	212	-	-	-	-	-	-	-
A-1	SH-2 13	SH-2 13	ピット		0.28	0.01	1 2 B-9 2	
A-3	SD-2 14	SD-2 14	現状遺構	平安時代	1.18×3.40	0.24	1 5 B-6 2 ~ 7 1	
C-1	SD-2 15	SD-2 15	唐破風彌		0.76×2.12	0.32	2 4 B-2 3 ~ 3 4	
C-1	SD-2 16	SD-2 16	唐破風彌		0.76×1.92	0.32	2 4 B-3 3 ~ 4 4	
A-2	SK-2 17	SK-2 17	土塙	現良・平安時代	2.30	0.70	1 4 B-4 0 ~ 5 1	
B-2	SD-2 18	SD-2 18	唐破風彌	平安時代	1.33×3.30	0.15	1 4 A-4 4 ~ 5 5	
B-2	SD-2 19	SD-2 19	唐破風彌	平安時代	0.79×3.40	0.12	1 4 A-4 4 ~ 6 5	
C-2	SD-2 20	SD-2 20	唐破風彌	平安時代	1.52×3.18	0.40	2 5 B-4 7 ~ 5 6	
C-2	SD-2 21	SD-2 21	唐破風彌	平安時代	0.56×5.32	0.22	2 8 B-3 7 ~ 5 6	
C-2	SH-2 22	SH-2 22	ピット		0.25×0.36	0.22	2 5 B-5 6	
C-2	SH-2 23	SH-2 23	ピット		0.00	2 5 B-5 6		
C-2	SH-2 24	SH-2 24	ピット		0.47	0.26	2 5 B-5 7	
A-2	SH-2 25	SB-0 03	現立柱建物跡柱穴	平安時代	0.68×0.78	0.45	1 4 B-3 3	
A-2	SH-2 26	SB-0 03	現立柱建物跡柱穴	平安時代	1.18×0.78	0.34	1 4 B-3 2	
A-2	SH-2 27	SH-2 27	ピット		0.45×0.46	0.21	1 4 B-1 2	
A-2	SH-2 28	SH-2 28	ピット		0.32×0.37	0.11	1 4 B-1 3	
A-2	SH-2 29	SH-2 29	ピット		0.30×0.31	—	1 4 B-0 2	
A-2	SH-2 30	SH-2 30	ピット		0.26×0.33	0.11	1 4 B-0 3	
A-2	SH-2 31	SH-0 03	現立柱建物跡柱穴	平安時代	0.84×0.74	0.27	1 3 B	
A-2	SH-2 32	SH-2 32	ピット		0.25×0.38	—	1 4 B-0 1	
A-2	SH-2 33	SH-2 33	ピット		0.43×0.55	0.29	1 4 B-2 2	
A-2	SH-2 34	SH-2 34	ピット		0.27×0.30	0.15	1 4 B-1 3	
A-2	SH-2 35	SH-0 06	現立柱建物跡柱穴	平安時代		0.36	1 4 B-2 0 ~ 3 0	
A-2	SH-2 36	SH-2 36	ピット		0.30×0.40	0.26	1 4 B-5 1	
A-1	SH-2 37	SH-2 37	ピット		0.53×0.60	0.18	1 3 B-0 1	
16年度	SH-2 38	SH-2 38	ピット		0.25×0.28	0.36	1 2 A-0 9	

15年度	SD-239	SD-239	筒状遺構		0.80×1.90	0.10	1.5A-4.8~5.9
久留 240	-	-	-	-	-	-	-
15年度	SD-241	SD-241	筒状遺構	平安時代	1.03×1.80	0.20	1.5A-9.8
15年度	SD-242	SD-242	筒状遺構	平安時代	1.50×2.20	0.11	1.5A-0.8~2.9
15年度	SH-343	SB-005	筒立柱遺物壁柱穴	中・近世	0.40×0.40	0.49	1.3A-0.9
15年度	SH-344	SB-005	筒立柱遺物壁柱穴	中・近世	0.40×0.40	0.62	1.2A-9.9
15年度	SH-345	SH-345	ピット		0.45	0.38	1.2A-9.8
15年度	SH-346	SB-005	筒立柱遺物壁柱穴	中・近世	0.58×0.50	0.58	1.3A-1.8
15年度	SD-247	SD-247	筒状遺構	平安時代	2.00×1.70	0.28	1.4A-7.8~9.9
15年度	SH-348	SB-006	筒立柱遺物壁柱穴	平安時代	-	0.29	1.4A-1.8
15年度	SD-349	SD-249	筒状遺構	平安時代	1.20×1.20	0.28	1.3A-8.8~9.8
15年度	SD-350	SD-350	筒状遺構	平安時代	0.62×1.40	0.18	1.3A-5.9~6.8
15年度	SK-281	SK-281	土坑	奈良・平安時代	0.31	0.50	1.4A-38~49
15年度	SX-252	SX-252	不明	奈良・平安時代	3.13	0.31	1.4A-2.8~3.8
15年度	SH-253	SH-253	ピット	-	0.2	0.19	1.4A-2.8
15年度	SD-254	SD-254	筒状遺構	平安時代	1.40×1.70	0.02	1.3A-4.8~4.9
15年度	SH-255	SH-255	ピット		0.32×0.38	0.05	1.3A-1.8
15年度	SH-256	SH-256	ピット		0.40	0.06	1.3A-6.8
A-2	SD-257	SD-257	筒状遺構		0.27×3.47	0.04	1.4B-4.2~5.3
A-2	SD-258	SD-258	筒状遺構		0.37×1.38	0.04	1.4B-5.2~5.3
A-2	SD-259	SD-259	筒状遺構		0.27×2.04	0.03	1.4B-5.2
A-1	SH-260	SB-004	筒立柱遺物壁柱穴	近世			鉛灰か 鉛灰か 鉛灰か

第3表 土製品一覧表

遺構番号	掲載番号	種別	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	孔径 (cm)	重量 (g)	備 考
SD-163	3	土玉	3.7	3.6	0.8	42.2		
SD-163	4	管状土錐	1.7	3.5		0.5	6.4	
SD-195	2	転用砥石	5.9	5.2	1.4		73.7	須恵器からの転用。
SD-195	3	瓦	(9.9)	(6.4)	(1.5)		104.8	凹面に布痕。凸面に縦目叩き痕
SD-198	1	管状土錐	1.2	2.0		0.4	2.2	
SD-220	3	管状土錐	4.3	5.5			46.4	
SD-242	22	瓦	(8.8)	(8.4)	(2.4)		221.8	凹面に布痕。凸面に格子叩き痕
SD-242	23	管状土錐	3.7	9.6	3.7	1.5	100.2	
SK-217	1	管状土錐	9.8	4.3	4.4	1.3	153.9	
13B-13	15	支脚	7.5	6.1	3.5		104.4	
15A-98	16	瓦	(7.3)	(5.4)	(2.4)	-	83.7	凹面に布痕
14B-62	17	転用砥石	6.1	5.0	0.9	-	48.0	摺り鉢からの転用。両側面を研磨。
12A-98他	18	管状土錐	(4.8)	3.8	3.3	1.1	51.8	
14B-11	19	管状土錐	(4.0)	3.3			15.5	
ST	20	管状土錐	7.2	2.3	2.5	0.8	35.8	
ST	21	管状土錐	4.8	1.3	1.4	0.4	7.5	
14B-61	22	管状土錐	4.1	1.8	1.6	0.5	8.1	
13A-28	23	管状土錐	3.8	1.0	0.9	0.4	2.5	
12A-98	24	管状土錐	3.7	0.8	0.8	0.3	2.1	
14A-18	25	管状土錐	3.3	1.0	1.0	0.4	2.6	
14A-98	26	管状土錐	3.5	1.1	1.0	0.3	2.6	
ST	27	管状土錐	3.0	1.3	1.4	0.4	2.8	

遺物計測欄の()付き数値は、完形でない場合の現存値である。ただし、砾石はすべて()なしで現存値とした。

第4図 石器及び石製品一覧表

遺構番号	掲載番号	種別	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	石材	重量 (g)	備 考
SD-190	1	輕石	96.7	75.7	61.4	輕石	142.3	
SD-218	1	輕石	54.8	41.5	27.6	輕石	23.5	
SD-247	7	霞石	95.6	53.8	35.4	砂岩	262.0	

第5表 土器観察表(1)

遺跡番号	地名 番号	時代	時期	種別	器種	深さ	口径 (cm)	幅員 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)	式形・開口	胎土	色調	成形	備考
SD-002 (SU-001)	1 平安	9C中葉	土器部	素		-	(1.8)	4.4	12.0	外面へテリ	-	白色粘物質 少量・褐色粒	外面褐色～赤 内面に赤褐色 褐色	並	
SD-003 (SU-002)	2 平安	-	土器部	素		-	-	-	34.8	ナゲ	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	内面に赤褐色 外面に赤褐色	並	
SD-006 (SU-004)	3 平安	9C後葉 ～本葉	土器部	杯	20%	-	(2.4)	9.8	34.5	ナゲ	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	に赤褐色	並	
SK-110	1 鎌倉・平安	-	土器部	素	33%	-	(2.4)	6.4	25.5	外面叩き 内面ナゲ 裏外へテリ	褐色粘物質 少量・褐色粒	内面褐色～暗 黃褐色、外面褐 色～褐色	直打		
SK-217	2 鎌倉・平安	8C	土器部	素	45%	12.9	25.8	-	(366.0)	外面へテリ・ナゲ、内面ナゲ	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	内面に赤褐色 外面に赤褐色	並	
SK-281	1 古墳	8C末葉 ～9C初葉	土器部	素	70%	11.8	9.7	5.0	(324.0)	ナゲ・裏外墨痕	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	内面褐色～暗 黃褐色、外面 に赤褐色	良好	
SK-381	2 古墳	7C後葉 ～中葉	土器部	素	45%	18.8	(18.0)	-	(384.0)	外面へテリ・ナゲ、内面へナゲ、 裂け	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	内面に赤褐色 外面に赤褐色	良好	
SD-163	1 平安	9C末葉 ～10C初葉	土器部	杯					7.2	ロクロ、ナゲ、面り高台	褐色粘物質 褐色粒少	褐色	並		
SD-163	2 平安	9C	粗底器	素			(1.8)		10.9	外・内面ナゲ	-	褐色粘物質 白色粘物質 少量・褐色粒	内面オーバーラ イブ色、外面オーバ ーリブ色、外 面に赤褐色	並	焼成施設
SD-190	1 平安	不明	土器部	杯					3.5	ロクロ、ナゲ	-	白色粘物質 少量	に赤褐色	良好	墨書き器
SD-191	1 古墳	7C末葉 ～8C初葉	土器部	素	13%	14.5	(4.1)		38.7	ロクロ、ナゲ、ヘタ剥り	-	褐色粘物質 少量・褐色粒	内面に赤褐色 外面に赤褐色	良好	
SD-191	2 平安	9C中葉	土器部	杯	45%	13.4	3.7	7.7	(59.0)	ロクロ、ナゲ、面筋部へテリ	-	褐色粘物質 少量	内面に赤褐色	良好	墨書き器
SD-191	3 平安	9C中葉	土器部	杯	20%	(1.8)	7.2	73.6	ロクロ、内面へテリ・ナゲ 内面ナ ゲ・裏外面筋部へテリ	-	褐色粘物質 少量	灰褐色	並		
SD-191	4 平安	9C中葉	土器部	杯	30%	12.5	(3.7)		33.7	ロクロ、ナゲ、底部下端部へテリ	褐色粘物質 白色粘物質 少量	褐色	良好		
SD-191	5 平安	9C末葉 ～10C初葉	土器部	杯		(1.8)	6.8	48.8	ロクロ、外面ナゲ、内面へナゲ、 面り高台。此部半らへテリ	褐色粘物質 白色粘物質 少量	内面赤褐色 外面に赤褐色	並			
SD-195	1 古墳	7C後葉 ～8C初葉	粗底器	素		13.8	3.9	-	(82.0)	ロクロ、ナゲ	褐色粘物質 少量	褐色	良好		
SD-196	1 平安	不明	粗底器	杯		30.8	(3.8)		3.4	ロクロ、ナゲ	-	褐色粘物質 少量	褐色	良好	
SD-199	2 平安	不明	粗底器	素		(2.2)			6.2	ナゲ	-	褐色粘物質 少量	褐色	良好	
SD-214	1 平安	8C後葉	土器部	杯		18.7	4.2	6.6	(26.0)	ロクロ、ナゲ、底部下端部へテリ、 裏外面筋部へテリ	褐色粘物質 白色粘物質 少量	内面褐色～外 面褐色	並		
SD-214	2 鎌倉・平安	不明	土器部	素	35%	(4.9)	3.3	(32.0)	ナゲ・基盤墨痕	褐色粘物質 少量	外面褐色	並	内面付着物 あり。墨小		
SD-214	3 平安	9C末葉 ～10C初葉	土器部	杯		7.7	(1.6)		14.8	ロクロ、ナゲ、面り高台	褐色粘物質 少量	褐色	良好		
SD-214	4 平安	9C末葉 ～10C初葉	土器部	素		2.8	(11.4)		(79.0)	ナゲ、面筋部	褐色粘物質 少量	褐色褐色～黑 褐色、外面に赤 褐色	並		
SD-219	1 平安	9C後葉	粗底器	杯	60%	12.2	3.3	8.0	72.5	ロクロ、ナゲ、面筋部剥り	褐色粘物質 少量	内面赤褐色 外面に赤褐色	並	焼成施設	
SD-219	2 平安	9C後葉	土器部	杯	50%	14.2	4.8	8.0	(129.0)	ロクロ、ナゲ、面筋部剥り	褐色粘物質 少量	褐色褐色～黑 褐色、外面に赤 褐色	並		
SD-219	3 古墳	古墳後葉	土器部	素					22.8	ヘタ剥り	褐色粘物質 少量	灰白色	良好		

第5表 土器観察表(2)

通称番号	開拓 事由	時代	時期	種類	器種	遺存度	口径 (cm)	最高 (cm)	底高 (cm)	重量 (g)	成形・調理	胎土	色調	焼成	備考	
SD-220	1	収集・平安	不明	須恵器	盤			(9.3)		48.4	外縁平行印、内面ナメ	青母粒多 褐色粘土質	内面黄色・外 面にぶい燒物色	良好	焼化粧成	
SD-221	2	収集・平安	不明	須恵器	盤			(1.8)		5.0	ロクロ、ナメ	白色粒・黑色 粒少	内・外面褐色 褐色(ミリー ブ)	良好		
SD-225	1	収集・平安	不明	須恵器	盤			(2.8)		8.4	ナメ	褐色粒少	灰白色	良好		
SD-242	1	平安	BC後期	土師器	杯	85%	13.3	4.0	6.7	(145.0)	ロクロ、ナメ、底部下端部へうけり、 底周縁赤色切り後へ剥り	青母粒多 白色粘土質	内面にぶい燒 物色	良好		
SD-242	2	平安	BC中後	土師器	杯	30%	12.8	(3.8)		22.5	ロクロ、ナメ	白色粘土質	内面褐色・外 面にぶい燒 物色	良好		
SD-242	3	平安	BC中後	土師器	杯			(2.1)	7.8	18.8	ロクロ、ナメ	青母粒少	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	並		
SD-242	4	平安	BC後期	土師器	杯	60%	12.6	3.8	6.2	80.6	ロクロ、ナメ、底周縁へラ剥り	青母粒多 白色粘土質	灰褐色	並		
SD-242	5	平安	BC末葉 ~10C前 期	土師器	杯	35%	13.4	3.6	7.2	(58.0)	ロクロ、ナメ、底外周部へラ剥り	青母粒多 褐色	内面褐色～ 灰褐色・外 面褐色	並		
SD-242	6	平安	BC後期	土師器	杯	70%	12.0	4.3	7.2	(130.0)	ロクロ、ナメ、底部下端部へうけり、 底周縁赤色切り後へ剥り	青母粒多	内面にぶい燒 物色・外 面褐色に ぶい燒物色	良好		
SD-242	7	平安	BC中葉 ~末葉	須恵器	杯	35%	13.1	3.6	2.9	22.7	ロクロ、ナメ、底外周部赤色	青母粒多 白色粘土質	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	並	焼化粧成	
SD-242	8	平安	BC中葉	土師器	盤			16.8	9.4		58.0	外縁へ剥り、ナメ、内面へラ剥り	青母粒多 白色粘土質 青母粒 粘土質 白色粒 粘土質少	内面褐色～ 灰褐色・外 面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	9	平安	BC中葉	土師器	盤					15.7	ナメ	青母粒多 灰 石・白色粘土 質	内面にぶい燒 物色			
SD-242	10	平安	BC中葉	土師器	盤				3.8		22.2	外縁へ剥り、ナメ、内面ナメ	青母粒・白色 粘土質	内面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	11	平安	BC	土師器	盤				(4.7)		19.8	ナメ	青母粒多 少	内面褐色・外 面褐色	良好	
SD-242	12	平安	BC中葉	土師器	盤			21.8	3.4		46.8	ナメ、外縁へ剥り	青母粒多 白	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	13	平安	BC前葉	土師器	盤				(4.8)		18.8	外縁へラ剥り、ナメ、内面ナメ	青母粒・石 灰少	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	14	平安	BC前葉	土師器	盤				(4.8)		18.4	外縁へ剥り、ナメ、内面へラ剥り	青母粒・白色 粘土質	内面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	15	平安	BC後葉	土師器	盤				(7.0)		41.0	外縁へ剥り、ナメ、内面ナメ	青母粒・白色 粘土質	内面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	16	平安	BC前葉	土師器	盤				(7.0)		33.2	外縁へ剥り、内面ナメ	青母粒・白色 粘土質	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	17	平安	BC前葉	土師器	盤				(5.8)		22.8	外縁へ剥り、ナメ、内面ナメ	青母粒・白色 粘土質	内面にぶい燒 物色・外 面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	18	平安	BC前葉	土師器	盤				(4.5)		92.0	不明(骨灰塗装)	青母粒多 白色粘土質 少	内面にぶい燒 物色	良好	
SD-242	19	平安	BC末葉 ~10C前 期	土師器	盤			19.6	4.4		38.8	外縁周縁压痕、内面ナメ	青母粒少 白色粘土質	内面青褐色 内面にぶい燒 物色	良好	

第5表 土器観察表(3)

遺物番号	同種番号	時代	用途	種別	器種	直径 (mm)	高さ (mm)	底径 (mm)	重量 (g)	成形・調理	胎土	色調	焼成 度	備考	
SD-943	20	平安・平安	不明	圓筒形	壺				14.8	外面平行引き、内面へつ折り	黒色胎土質	灰白	良好		
SD-943	21	平安	BC後半	瓦棱陶器	手作小瓶			(3.7)	29.4	ロクロ、ナダ、瓦棱	黒色较少	内・外褐色、褐色灰オーラー色	良好		
SD-947	1	古墳	古墳後期	土器類	杯	15%			26.9	ナダ	表面凹凸質、白色胎土質、白色灰状質多少、褐色灰状質多い	内面褐色・外面褐色・黑色	良好		
SD-947	2	平安	BC中葉	土器類	杯	30%	12.6	(3.2)	18.9	ロクロ、ナダ、体側下部斜削へつ折り、底斜削へつ折り	白色灰状質質	内面褐色・外面にぶい褐色	良好		
SD-947	3	平安	BC後葉	土器類	杯	30%	(2.0)	6.0	27.5	ロクロ、ナダ、底斜削へつ折り作り	砂粒・白色灰状質	内面褐色・外面褐色・灰褐色	良好		
SD-947	4	平安	BC後葉	土器類	杯	15%	(1.6)	6.6	32.4	ロクロ、ナダ、底部作り足	表面凹凸質、褐色灰	にぶい褐色	良好		
SD-947	5	古墳	古墳中期	土器類	壺	20%		(1.6)	7.2	41.1	外面ナダ、底外へつ折り	表面質・石英粒状質、白色灰状質多少	内面灰褐色・外面褐色	良	
SD-947	6	平安	BC後半	瓦棱陶器	瓶		9.8	1.7	10.8	ロクロ、ナダ	黒色胎土質	灰白色・褐色	良好		
BK-252	1	古墳	TC中葉	圓底器	杯	10%	(3.1)		11.4	ロクロ、ナダ	白色胎土質	灰白色	良好		
14B-01	1	不明	不明	陶器	杯		15.2	(9.7)	13.8	178.1	ロクロ 付高台	白色较少	灰白色・胎土灰褐色	良好	
14A-58	2	古墳	古墳後期	土器類	高杯				75.1	外面へつ折り・ナダ、内面へラナダ	表面凹凸質・白色灰状質多少、褐色灰状質多い	にぶい褐色	良		
17	3	奈良	BC後葉	圓底器	杯			(1.2)	7.6	30.7	ロクロ、ナダ、底斜削へつ折り	表面灰少、褐色灰状質多い	にぶい黄褐色	微化焰燒成	
14A-59	4	平安	BC前葉	土器類	杯	30%	(3.1)	8.4	(61.0)	ロクロ、ナダ、底斜削へつ折り	表面灰少、白色灰状質、褐色灰状質少	褐色～にぶい褐色	良		
15A-98	5	BC後葉～後葉	土器類	杯			(3.0)	6.0	21.6	ロクロ	表面灰少、褐色灰状質少	灰褐色～褐色	良		
23T	6	平安	BC後葉～後葉	土器類	杯			(3.8)	7.6	34.9	ロクロ、削り高台	褐色灰、白色灰	にぶい褐色	良好	
PT	7	平安	BC	圆底器	壺				45.3	平行叩き、内面に輪沿み痕	表面灰少、褐色灰状質少	外面灰褐色・内面にぶい褐色	微化焰燒成		
14A-59	8	平安	BC	圆底器	壺				21.8	平行叩き	表面灰少、白色灰状質、石英・褐色灰状質少	内面にぶい褐色	良好		
14A-48	9	奈良・平安	不明	圆底器	瓶				7.7	ロクロ、ナダ	褐色灰少	灰白色	良好		
12A-95	10	不明	不明	圆底器	壺				11.0	ナダ	表面灰少	胎土にぶい褐色	微化焰燒成		
15A-79	11	不明	不明	陶器	平底				18.7	ロクロ、ナダ、削り高台	表面灰少、褐色灰状質少	にぶい黄褐色	良好		
15A-89	12	平安	BC	圆底器	壺				21.9	ロクロ、褐色(茶褐色)	褐色胎土質	灰褐色・胎土灰褐色	天目系燒		
2T	13	不明	不明	瓦棱陶器	壺				19.4	ロクロ	白色胎土質	灰褐色	良		
27T	14	平安	BC	圆底器	壺			(1.1)	6.2	13.8	自然胎土	褐色胎土質	オリーブ灰色	良好	複合

II. 遺物番号は詳細及び細部の遺物番号に対応する。またトレンチ及びグリットで取り上げた遺物は遺物外出土遺物で一括して扱い、通し番号を付けた。

3. 時期は、古墳時代については前期・中期・後期の3段区分とし、1段落内の区分については奈良・平安・中葉・後葉の各段15年の4段区分を原則にして記述した。

4. 重量は、遺物の重量を示す。()内の数値は石膏等により復元した後の重量を示す。

第6表 非掲載遺物重量表(1)

(単位: g)

調査区	遺構・グリッド	土器		頸部器	灰釉陶器・中柱陶器	近世陶器	土錠	土製品	石	合計	備考
		直・亮・鉢類	杯・高杯類								
A-1	SD-163	66.6	75.0	93.3					2.5	237.4	
A-2	SD-185	15.7	19.3							35.0	
A-3	SD-190	26.9	3.6				2.0			32.5	
A-3	SD-191	17.7	134.7							152.4	
A-3	SD-192	224.9	5.4							230.3	
A-2	SD-195	201.2	98.3	158.9						458.4	
A-2	SD-198		4.2							4.2	
A-1	SD-199	726.1	82.2	20.3					5.6	834.2	
B-1	SD-203	14.8								14.8	
B-1	SD-208		18.7							18.7	
A-3	SD-214	32.5	31.0	15.9						79.4	
C-1	SD-216	3.7								3.7	
B-2	SD-218			8.8						8.8	
B-2	SD-219	47.9		22.4					9.5	79.8	
C-2	SD-220	474.7	36.1	9.8					725.5	1248.1	
C-2	SD-221	57.0	22.3							79.3	
16年	SD-242	1249.4	159.9	181.4					25.4	1616.1	
16年	SD-247	110.7	61.9	172.2						344.8	
A-1	SK-164	12.4	7.0							19.4	
A-1	SK-170	201.0	3.0						57.7	261.7	
A-2	SK-217	230.0	96.0	3.5						328.5	
16年	SK-251	939.8							180.8	1120.6	
A-1	SH-168	14.6	2.9							17.5	SB-001
A-1	SH-180			4.7						4.7	
A-1	SH-193	124.3							171.0	295.3	SB-001
A-2	SH-197	4.7								4.7	SB-002
A-2	SH-200	5.9	5.2							11.1	SB-003
A-2	SH-201	6.7	9.4							16.1	SB-002
B-1	SH-204	3.8	3.2							7.0	
A-2	SH-225	70.2	5.4						33.2	106.8	SB-003
A-2	SH-226	19.9	11.4	13.8						45.1	SB-003
A-2	SH-231	20.4								20.4	SB-003
A-2	SH-236		10.0							10.0	
16年	SH-243								24961.3	24961.3	SB-005
16年	SH-244								24346.0	24346.0	SB-005
16年	SH-245	10.1								10.1	
16年	SH-246								19419.0	19419.0	SB-005
16年	SH-248	33.2	38.0	62.2						133.4	SB-006
16年	SX-252	293.4	164.5	39.5				6.6		504.1	
16年	12A-98	198.7	9.1	53.8						261.6	
16年	12A-69			97.6						97.6	
B-1	12A-73	56.4	25.0						2.0	83.4	
16年	12A-78	49.8	45.2	11.0						106.0	
16年	12A-79			20.0						20.0	
16年	12A-88	260.0	49.0	18.4	1.0				4.8	333.2	
16年	12A-98	589.0	104.6							693.6	
A-1	12B-42			31.6						31.6	
A-1	12B-43	65.0	18.6	13.8						97.4	
A-1	12B-71	26.2	3.6							29.8	

第6表 非掲載遺物重量表(2)

(単位: g)

調査区	遺構・グリッド	土器		須恵器	灰陶陶器・中盤陶器	近世陶器	土錐	土製品	石	合計	備考
		壺・甌・鉢類	杯・高杯類								
A-1	12B-91	11.6								11.6	
A-1	12B-93	56.0	3.8						9.7	69.5	
16年	13A-08	249.2	17.0						2.9	269.1	
16年	13A-09	6.8	5.0							11.8	
16年	13A-18	94.0	44.0							138.0	
16年	13A-28	136.8	7.4							144.2	
16年	13A-29	49.0	11.6	24.8						85.4	
B-1	13A-64	21.8								21.8	
16年	13A-59				91.6					91.6	
16年	13A-68	151.0		49.2		8.6			5.3	214.1	
16年	13A-89			112.4	45.2					167.6	
16年	13A-99			73.6						73.6	
A-1	13B-01	27.8	26.2							54.0	
A-1	13B-02		14.2							14.2	
A-1	13B-12	33.0		28.4						61.4	
A-2	13B-32	2.4	12.6							15.0	
A-2	13B-33								2.6	2.6	
A-2	13B-43	22.8							81.4	104.2	
A-2	13B-52	18.2	13.4	10.8						42.4	
16年	14A-18	28.0	15.6	51.6						95.2	
16年	14A-38	78.2	53.2	47.6					11.8	189.6	
16年	14A-48	152.6	54.2						3.6	210.4	
16年	14A-78	178.6	45.8	58.6						283.0	
16年	14A-88	86.6								86.6	
A-2	14B-11	22.8		10.4						33.2	
A-2	14B-43	16.0				8.6				24.6	
A-2	14B-63			36.4						36.4	
16年	15A-29	13.4								13.4	
16年	15A-38	92.6	4.6							97.2	
16年	15A-48	16.0								16.0	
16年	15A-58	173.6	26.0	1.4					61.1	262.1	
16年	15A-78								367.1	367.1	
16年	15A-98	12.2	9.8	20.0						42.0	
A-3	15B-51	63.2	51.6						4.4	119.2	
A-1	1T	28.4	29.6							58.0	
A-2	2T	17.4	29.5	57.2						104.2	
A-2	3T	64.8	12.6							77.4	
B-1	4T	89.8		21.0						110.8	
B-1	5T	4.4	2.8	24.4						31.6	
B-2	6T	6.0	1.4							7.4	
B-2	7T	6.0		7.0						13.0	
A-3	8T	90.2	16.0	79.4						185.6	
	9T	47.0			22.6					47.0	
C-2	18T	46.6	28.0							74.6	
	23T	50.2								50.2	
	合計	8774.5	1895.5	1789.8	137.8	8.6	14.2	18.4	70478.8	83117.6	

第3章 まとめ

田向遺跡が成立した時期を明らかにすることは、遺跡の立地している自然堤防や三角州・砂州の堆積年代を解明する手がかりとなる。また、集落の立地の違いは、生活をする上で様々な工夫を生む。本稿では、検出した遺構や出土した遺物をもとに本遺跡の成立時期を明らかにするとともに、海に近接し、砂層を地盤とする土地の利用の仕方についても考えてみたいと思う。

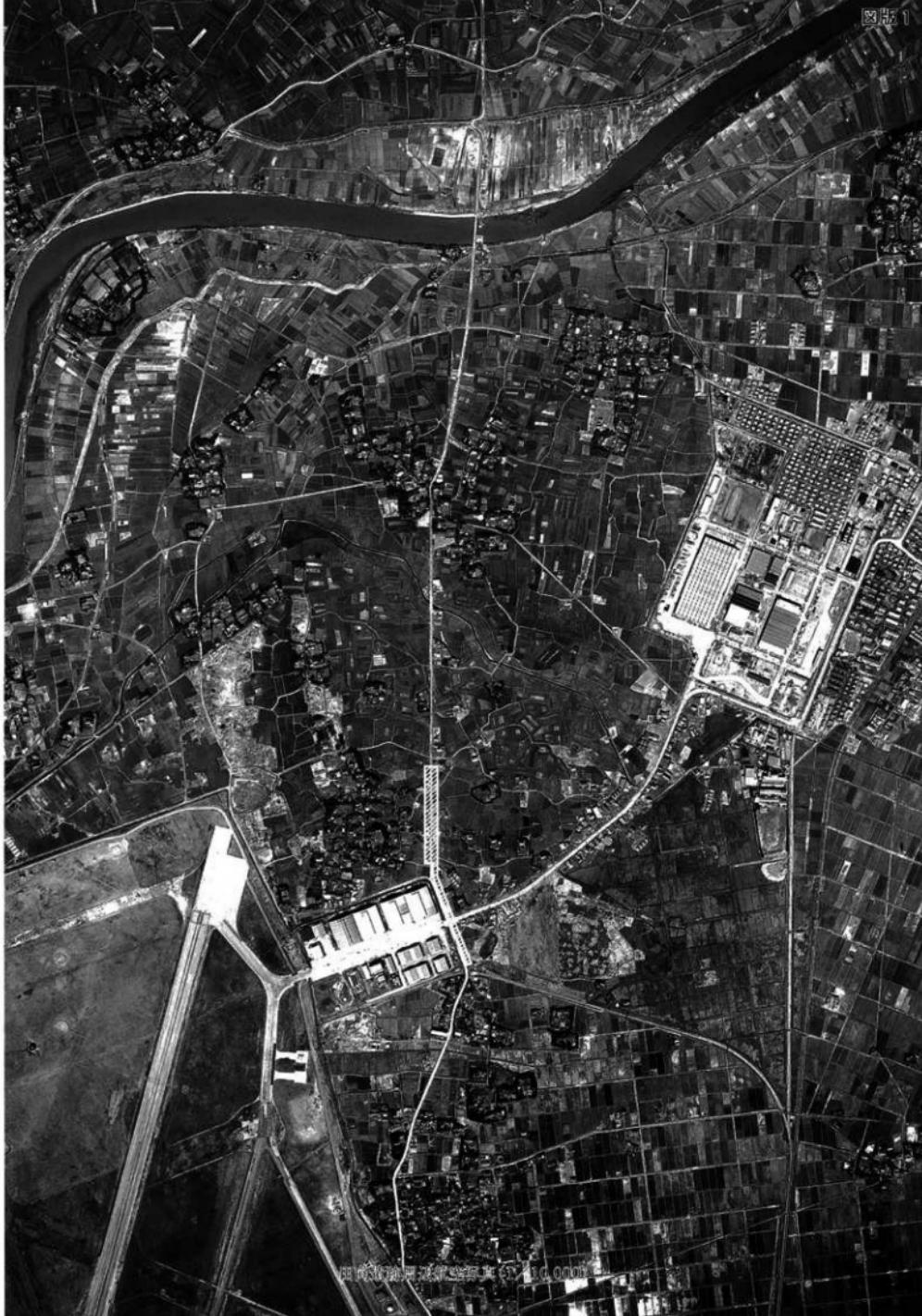
まず、出土遺物から考えてみると、今回の調査区の北側で調査を行った田向遺跡(1)では古墳時代前期以降の遺物が出土している。特に古墳時代前期の遺物は、竪穴住居跡を検出した中央区から北側に多く出土している。これに対して、南区は古墳時代の遺物が減り、奈良・平安時代の遺物が増加していく。田向遺跡(2)の出土遺物は奈良・平安時代、特に9世紀代の遺物が中心となる。これは、古墳時代の遺物が主体となる遺構が見られないことにもよるが、このことは遺跡の立地条件で差異があるのだろうか。第1図「遺跡の位置と周辺の環境」で利用した国土地理院発行の「土地条件図」を見ると、田向遺跡(1)の北乃至北西方向に自然堤防が形成されている。自然堤防上では、標高地として比較的水はけがよく、生活条件がよいことから、低地よりもいち早く集落が形成されたと考えられる。この自然堤防にほど近い北区や中央区では同じ条件下にあったものと考えられ、他の三角州や砂州の低地よりも早い時期の住居跡が検出されたものと思われる。自然堤防上よりも水はけの悪い三角州や砂州地域は、生活環境が整った後、住居（掘立柱建物跡）を構えることになるのではないかと考えられ、田向遺跡(1)の南区及び田向遺跡(2)の遺物の中心が9世紀以降となるのはこのことによるのではなかろうか。

次に検出した遺構から考えてみると、田向遺跡(2)の遺構の中で最も多く検出したのが溝状遺構である。低地での土地利用を考える上で、重要な条件が排水路の整備であろう。排水路を整備することは土地を区画することにもなる。SD-190・218・247の溝と同時期と考えられるSD-214・241の溝がほぼ直行していること（直行箇所は擾乱だが）やSD-199の溝と平行にSB-001の柱列が並ぶことは、その溝で土地が区画されたり、その区画に沿って建物が建てられた可能性が考えられる。このような区画が整備されるのが9世紀以降ではなかろうか。

また、時期は新しい（近世以降の可能性もある）と思われるが、SB-005のように柱穴内に裏込め用として大量の碎石を入れて柱を固定する方法は、砂層を地山とする建造物を考える上で興味深い事例の一つではなかろうか。

以上のことから、遺跡が立地している自然堤防及び三角州・砂州地域は、少なくとも古墳時代の頃までにはこれらの地形が形成されており、その微妙な地形を人々は巧みに利用しながら、住環境を整えていったものと思われる。

写 真 図 版





A - 1区より北側遠景（南から）



A - 2区より南側遠景（北から）



A - 1 区全景（東から）



A - 2 区北側全景（東から）



B - 1 区全景（北から）



A - 2区南側（南から）



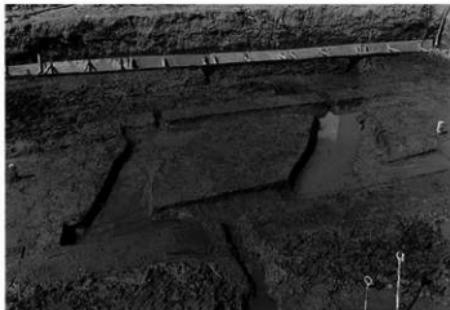
B - 2区全景（北から）



A - 3区北側（南から）



A - 3区南側（南から）



C - 1区全景（東から）



C - 2区全景（北西から）



16年度調査区北側（北から）



16年度調査区南側（南から）



SX-252 (北西から)



SK-170 完掘 (東から)



SK-217 遺物出土状況 (南から)



SK-217 完掘 (東から)



SK-251 底面遺物出土状況 (東から)



SK-251 完掘 (東から)



SD-163 完掘（北から）



SD-190 断面（北から）



SD-192 遺物出土状況（南から）



SD-195 断面（東から）



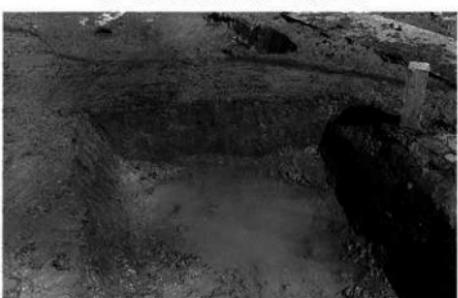
SD-198 断面（東から）



SD-199 遺物出土状況（北東から）



SD-207 完掘（南東から）



SD-214 断面（南西から）



SD-218 完掘（南から）



SD-219 断面（北西から）



SD-220 断面（南西から）



SD-221 断面（南西から）



SD-242 遺物出土状況 1（南西から）



SD-242 遺物出土状況 2（南西から）



SD-247 遺物出土状況（南東から）



SD-249 完掘（東から）



SH-168 <SB-001> 断面（西から）



SH-168 <SB-001> 完掘（西から）



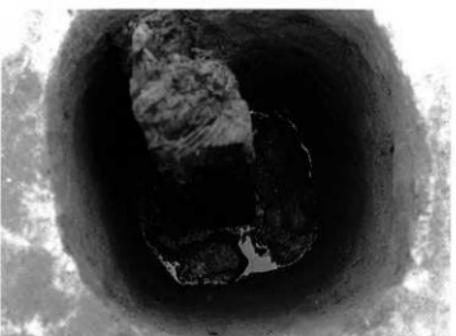
SH-196 <SB-002> (南西から)



SH-226 完掘 <SB-003> (南から)



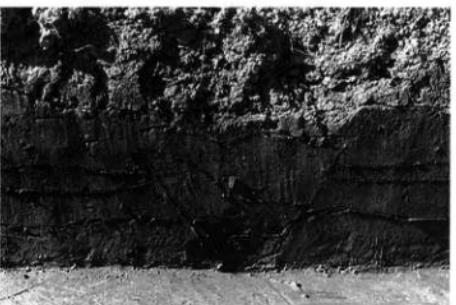
SH-244 <SB-005> 柱・碎石出土状況 1 (南から)



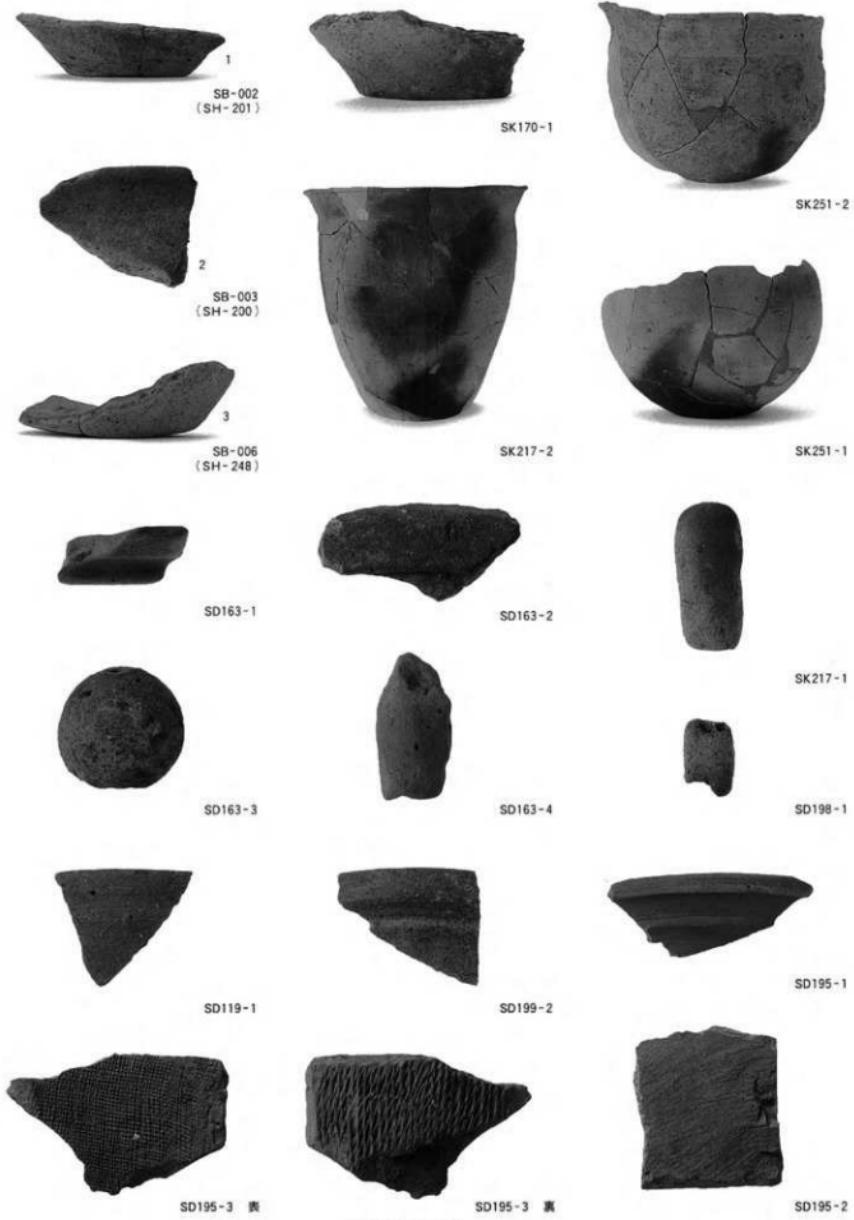
SH-244 <SB-005> 柱・碎石出土状況 2 (南西から)



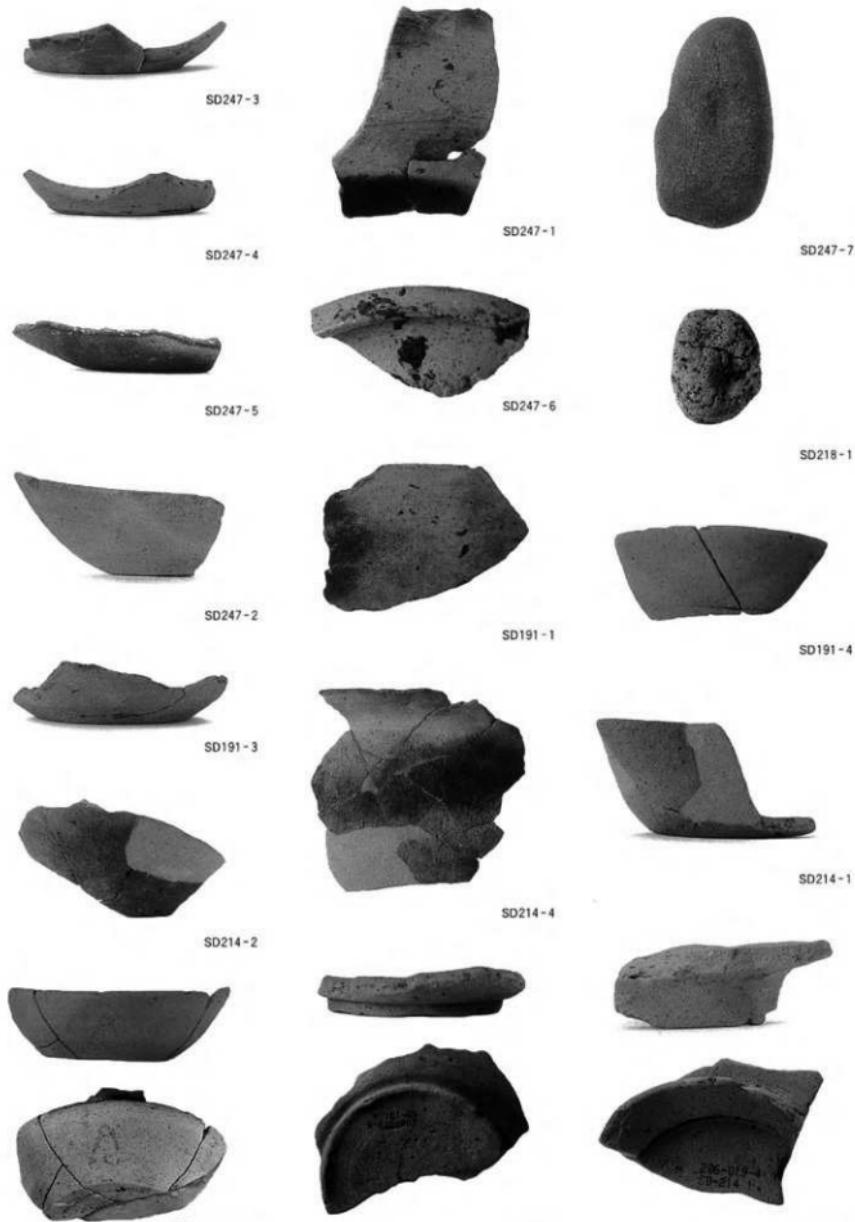
SH-248 完掘 <SB-006> (東から)



SH-260 断面 <SB-004> (東から)



遺構内出土遺物 1

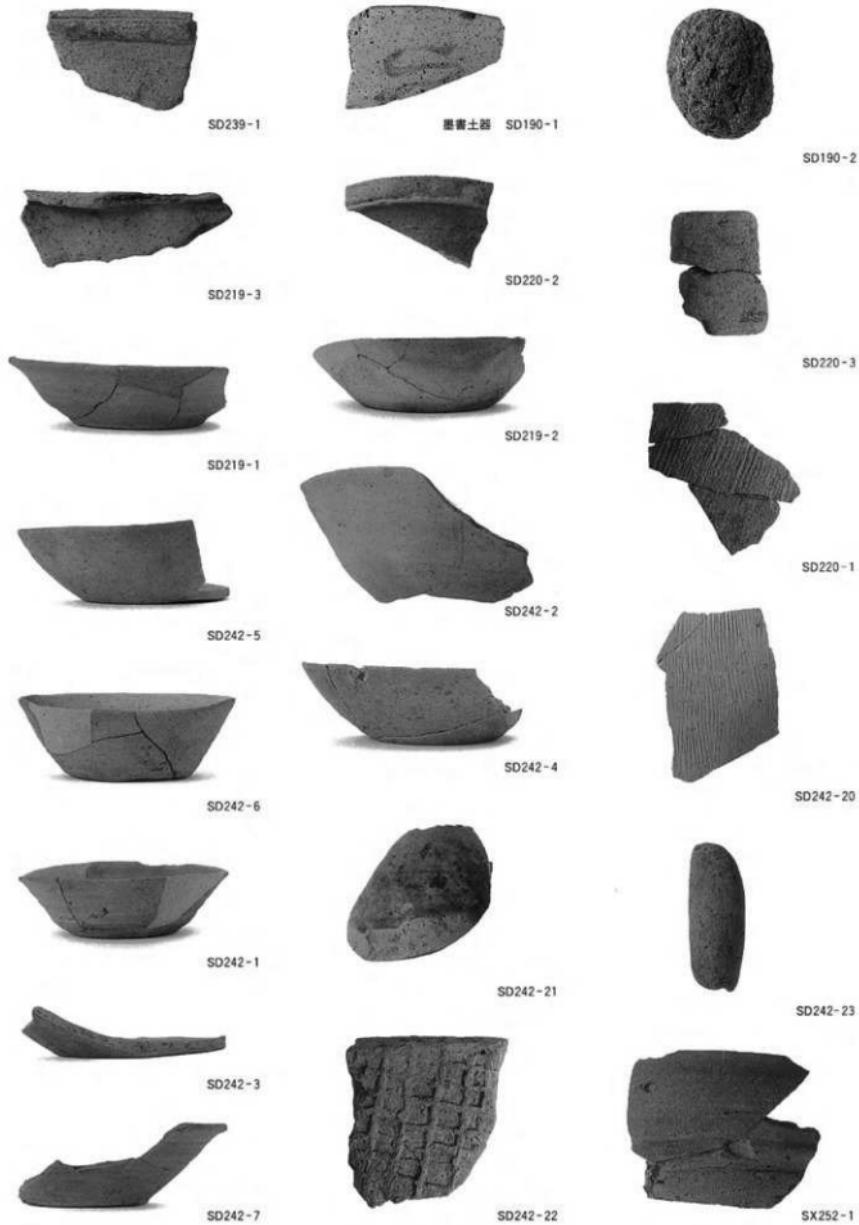


墨青土器 SD191-2

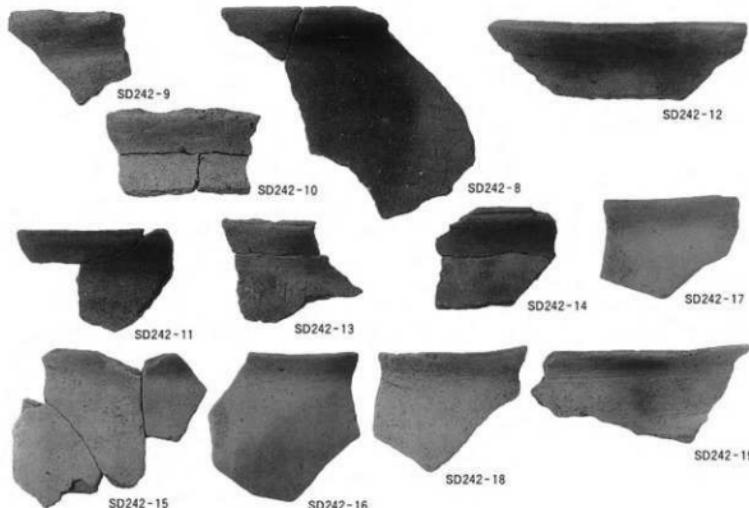
SD191-5

SD214-3

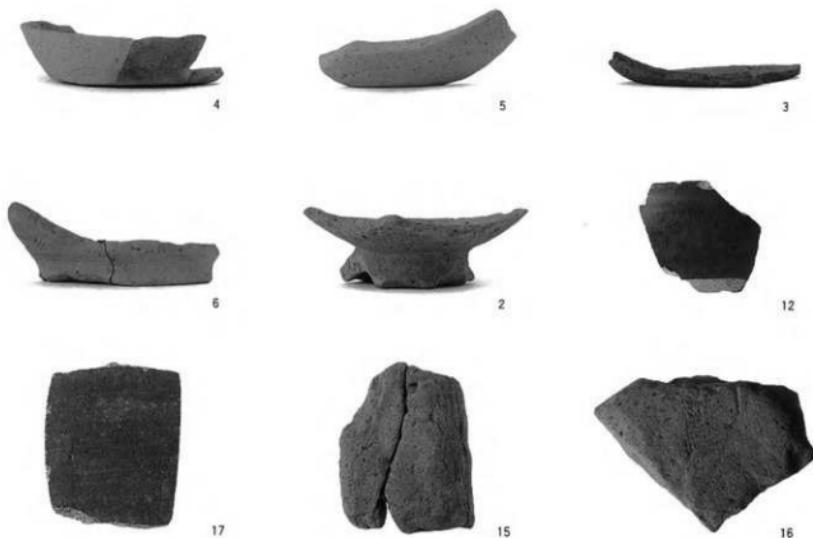
遺構内出土遺物 2



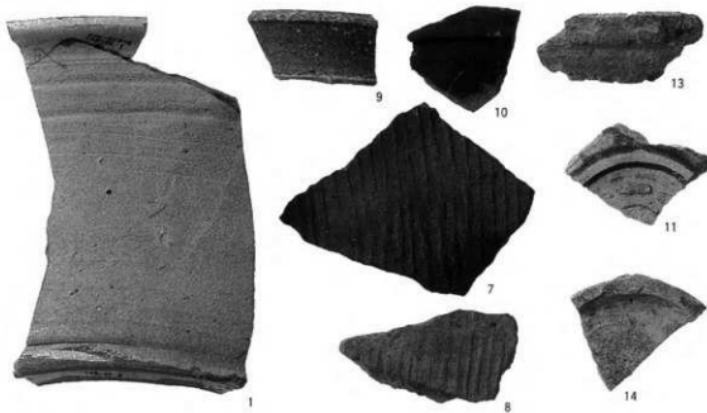
遺構内出土遺物 3



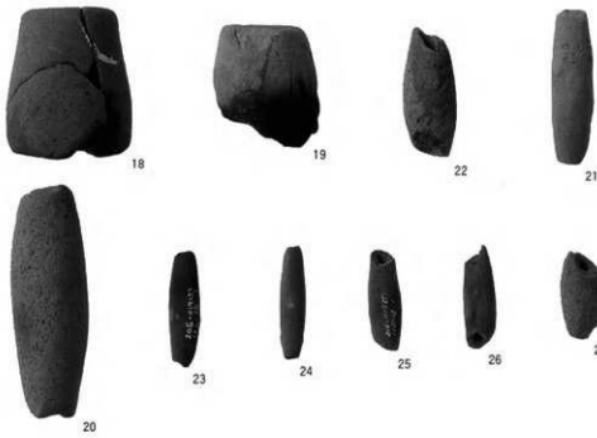
遺構内出土遺物 4



遺構外出土遺物 1



遺構外出土遺物 2



遺構外出土遺物 3

報告書抄録

ふりがな 書名	きさらづし たむかわいせき 木更津市田向遺跡						
副書名	木更津都市計画道路3・3・7号中野畠沢線埋蔵文化財調査報告書						
卷次							
シリーズ名	財団法人千葉県文化財センター調査報告						
シリーズ番号	第521集						
編著者名	地引尚幸						
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター						
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043-422-8811						
発行年月日	西暦2005年3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド	経 緯 度	調査期間	調査面積	調査原因	
田向遺跡	千葉県木更津市江川 字鶴田709ほか	206	019 35度 24分 12秒	139度 55分 18秒	20030117～ 20030328 20040601～ 20040625	3,771m ² 570m ²	道路建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 踪	主 な 遺 物	特 記 事 項		
田向遺跡	集落跡	奈良・平安時代 中・近世	掘立柱建物跡 土坑 溝状造構 掘立柱建物跡	4棟 4基 29条 2棟	古墳時代土器・須恵器、奈良・平安時代土器・須恵器・瓦・陶器・土器、中・近世陶器	砂州・三角州上に奈良・平安時代の掘立柱建物跡や土坑が検出され、同時に集落が形成されていたことが確認された。	

千葉県文化財センター調査報告第521集

木更津市田向遺跡

—木更津都市計画道路3・3・7号中野烟沢線埋蔵文化財調査報告書—

平成17年3月25日発行

編 集 財團法人 千葉県文化財センター

発 行 千葉県県土整備部

千葉県千葉市中央区市場町1-1

財團法人 千葉県文化財センター

千葉県四街道市鹿渡809-2

印 刷 大和美術印刷株式会社

千葉県木更津市潮浜2-1-10
